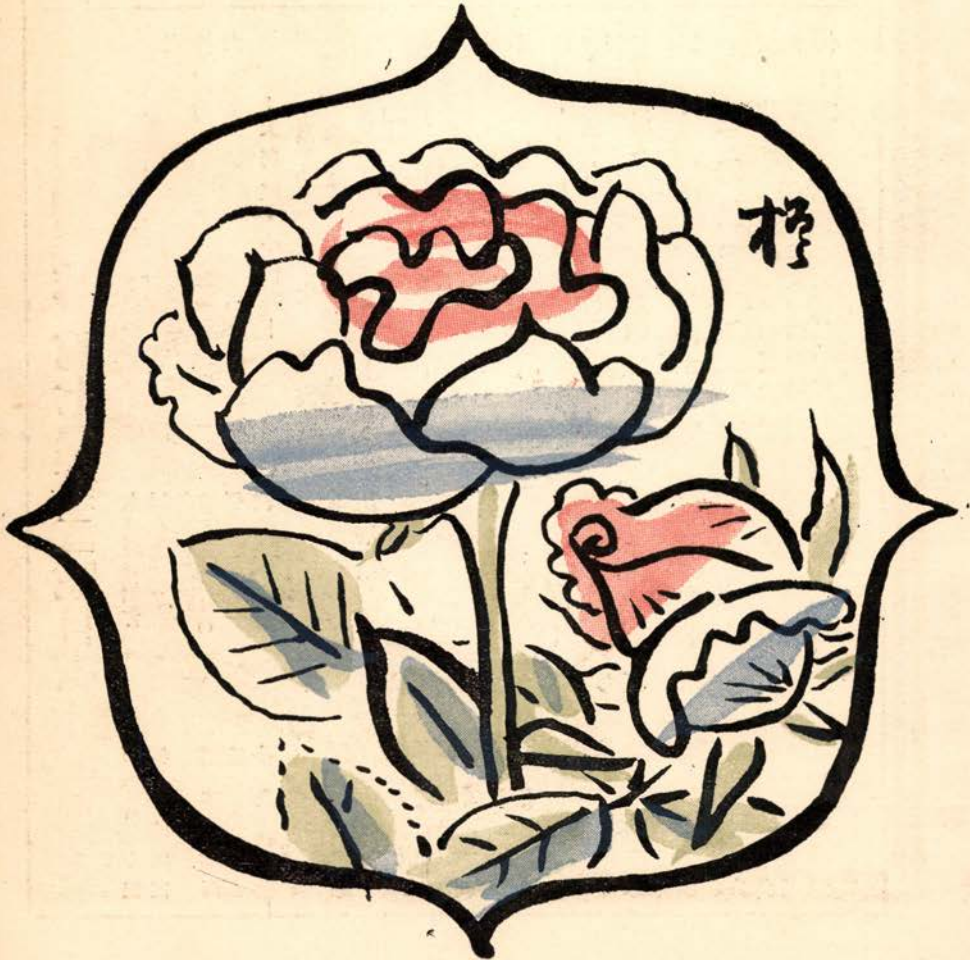


郎路生麻・幹主

# 川柳新誌

號 月 二



大正十三年三月三日  
昭和五年二月一日  
發行(每月一回)日發行

川柳雜誌

第七卷 第二號

川柳雜誌社發行

# 二月例會

- ▼日時 二月六日(木曜)午後六時半
- ▼場所 南區清水町電停西入北側
- ▼兼題 「留守」三句
- ▼會費 三十錢
- 初心者の來會を大いに歡迎す

# 冷刀追悼句會

- ▼日時 二月十五日(土曜)午後六時半
- ▼場所 南區清水町電停西へ入北側
- ▼兼題 「悔み」
- ▼冷刀を懷ふ 麻生路郎
- ▼會費 三十錢

# 各地支部増設

本社は川柳の社會化を實現させるため全國各府縣に支部を増設いたします。柳壇のため且又「川柳雜誌」のため眞面目に支部幹事を引き受け極力「川柳雜誌」の擴張運動を援助してやらうといふ川柳家は本社宣傳部へ支部設置希望の旨を申込まされたい。

# 川柳雜誌 第七卷第二號目次

## 感想・評論

素  
竹馬居雜筆  
大空から  
前田雀二郎  
蛭子省二  
安井ひろし

——大問題・小問題——

川柳博士出でず  
川柳を客觀せよ  
柳論を癡む  
安川久流美  
出口雨町  
大窪文芳

## 研究・其他

柳梅二十四編まで(十三)  
評釋  
人間・馬・魚  
川上三太郎  
紋太、ひろし  
革耶、亂就

## BUILDING

エーガを懐しむ  
婦人の脚  
隣寸と川柳人  
岩本素人  
伊藤神山  
安川久流美  
大西八歩  
魚住三子平

## 一路集(募集句)

同僚  
角帯  
小商ひ  
前田雀郎選  
高橋かほる選  
酒井駒人共選  
川合舟々

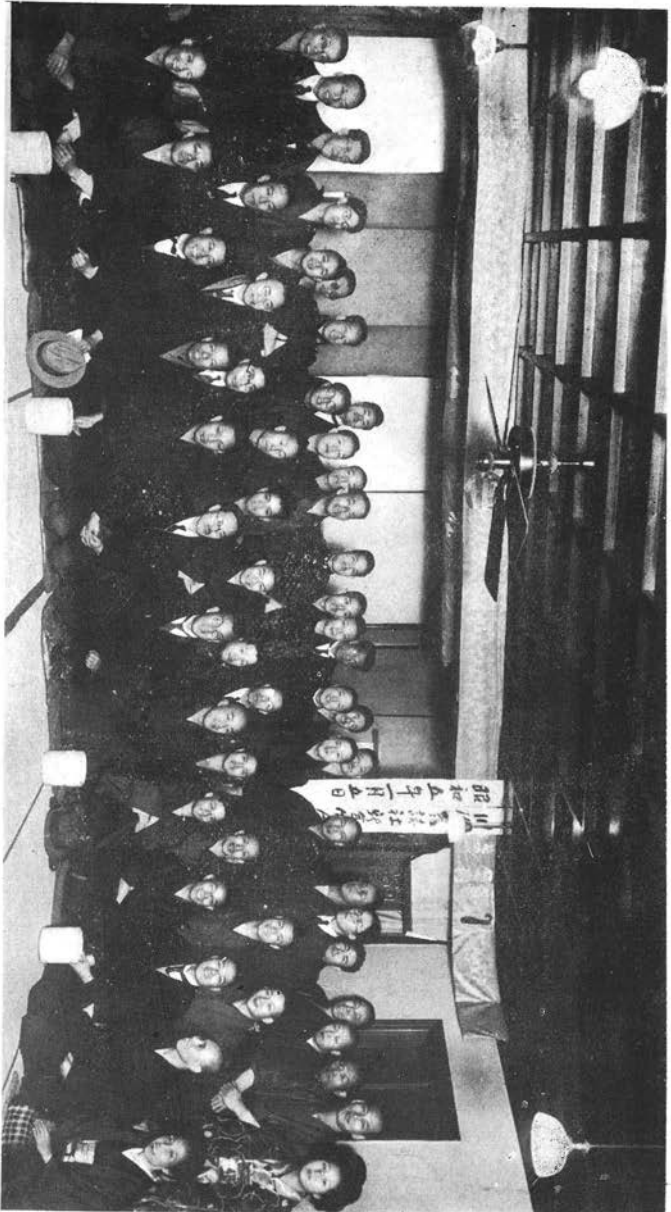
## 本社新春句會

同人社友會  
各地柳壇  
杭全町MEMO  
編輯後記  
表紙

## 創作

近作  
川柳塔  
竹内多聞  
安井ひろし  
伊藤緑之助  
川合舟々  
水谷鮎美  
朝本新雨  
橋本新雨  
若井たけし  
安西杏三  
桑原京郎  
上田柳影  
池田雪峰  
丸山石竹  
森山公二  
富集野馬  
近作柳樽  
安川久流美  
諸家  
安井ひろし記  
橋本綠雨記  
橋本綠雨  
小出檜重  
麻生路郎  
住田亂耽  
松盛琴人  
出口雨町  
伊藤愚陀  
岩崎柳二  
松丘二  
植田濁水  
中澤翠峯  
島田光生  
中見閑公  
西村閑角  
櫻井圓角  
安川久流美





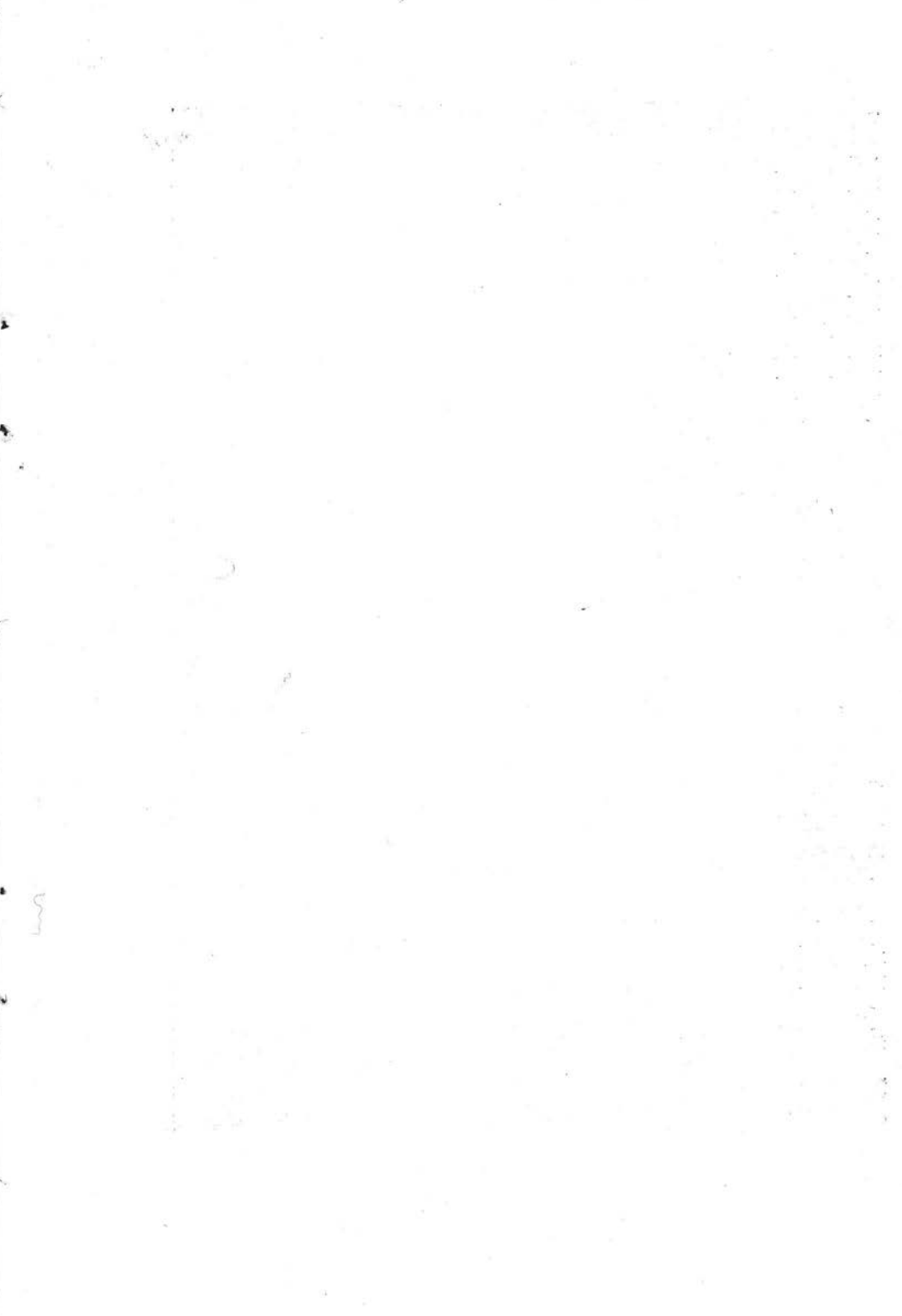
吉例により  
記念撮影

(前列向て右より)七葉佐、成馬、ひろし、僧郎、沐天、紋太、水府、路郎、雀郎、黒天子、凡平、嘉月、(中列)山茶花、不澤、千春、明、果、葉、か、ら、乱、歌、鶴、足、香、豆、秋

# 本新社春會

(後列)上江、炭、車、富、水、柳、影、麥、角、鶴、峯、雨、町、公、二、鳴、玉、多、郎、鮎、美、翠、夢、卜、居、水、仙、梵、阿、彌、麓、生、山、雨、燈、英、郎、波、野、喜、由、愚、陀、紫、明、勝、人、吉、丁、綾、雨、響、人、吉

昭和五年二月五日  
於日本橋攝影部  
總監督 柳影







## 近作

麻生路郎

ひきりるればひきりは限りなくさびし  
名をすてて十七八の戀もせむ  
たべさしを食ふほぎ男惚れてゐる  
だらしなさにいつそ死なうかたれごしの  
愚かにも顔見にゆけば雪になる  
人妻よ不惑まはかなしくもあるかな  
撞球<sup>ク</sup>よころべこころを吸ふてころびゆけ  
濱口さんの口元さむし寒の入り  
政治より火鉢がよろし寒の入り  
供託に質置く人をたのまんや

# 近作柳樽

路郎

選

二

子守もう役者が好きの嫌ひのこ  
 正直に明かせば切れもするものを  
 いゝ機嫌ラデオの唄に立つて舞ひ  
 殺したさすがおに書けぬ診斷書  
 制服の威厳へ女將馴れ切つて  
 親切な巡查は地理を知つて居ず  
 懸命の晴着が木賃のユットピア  
 眠る事それか吐つてはくれず  
 首にする氣か連れだつた蓮の池  
 ありし頃よく連れだつた蓮の池  
 荒物屋賣値チヨイく忘れ居  
 紅の水引の夢丙午  
 十呂盤をはじかぬ家を娘は望み  
 ワンタンの笛に詩集を閉じて寝る  
 朝まだき取次電話かゝつて來

大阪 大阪 京都 同 同 大阪 同 松山 同 同 同 大阪

菊 同 同 同 雨 同 狐 同 同 同 同 夕 同 同

路 眠 愁 羊 鐘







築地を見たり義江を聞いたり  
 眞實をさがしあぐんだ煙草吸ふ  
 總裁の準備だ雲は天に在り  
 うなじは圓し桃色の肌思ふ  
 雨よ降れ風吹け藝妓が通ります  
 子のないをよいこはおれをからかふ氣  
 笑ひ顔鼻超然こ動かない  
 流行におくれて金をためてゐる  
 本當を云ふても金になるじやなし  
 來春に芽生ゆる蔀さ思ひなく  
 世の罪を見おろしてゐる鬼瓦  
 隠棲を訪へば花みな白う咲き  
 約束の場所です時計を進めさき  
 辻堂があるので母に來てもらひ  
 婉曲に妻は晴着の事を云ひ  
 きの店も經濟學者ばかりなり  
 せめて子に炬燵したらふ此の寒さ  
 黎明の色失業に強すぎ  
 親の恩忘れたやうに下宿する  
 こほれた積に鶏の親子よ

同 大 同 鳥 同 同 同 大 同 神 同 大 同 横 奈 同 同 同 同 同  
 阪 取 阪 戸 阪 良

同 卜 同 湖 同 千 同 莢 同 可 同 幸 同 同 籬 同 同 大 同 同  
 居 山 春 一 村 泉 楓 子









俺一人食へぬ事ない若さにて  
 自決して今日晴ればれ湯につかり  
 磨ぎ馴れし米の白さも淋しかり  
 情實のきづなくに身を任せ  
 預つて置くこ親方それつつきり  
 悪者にされて仲居はそれでよし  
 うれしい髪を父に見られて  
 顔を會はさぬからこてうそを書く  
 奥さんこ呼び合ひ社宅仲がよし  
 餅を焼く火鉢こに未練残る用  
 大霜に忘れられてあるこの足駄  
 戀をして仕事少しもはかこらさず  
 大阪こ云ふ味知つてまた家出  
 春になりや借りる處もあるこ云ひ  
 鐵橋の旅情をそこる響きなり  
 やり過ぎて醫師法違反する按摩  
 失戀に悩みし心疲れ果て  
 一週忌佛間いつばい父の靈  
 診斷が個々に違つて死んで行き  
 輝く眼手はさりけなく編んでる

堀 同 大 同 堀 同 神 同 大 同 堀  
 野 阪 阪 戸 阪 阪 戸 阪 阪 戸  
 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同  
 柳 同 柳 同 柳 同 柳 同 柳 同 柳  
 兒 草 萌 光 生 石 樹 兒 子 童 汀 笑 月  
 路 天 亭 絃 絃 絃 絃 絃 絃 絃 絃 絃



此の若さ子がある等々思はれず  
 子の薬母もすこうし呑んで見せ  
 たまさかに出合ふて見れば子供連れ  
 搾取した金で慈善のなんのかの  
 壓迫の温みで寝つく紺蒲團  
 逆境になつて毎朝日を拜み  
 松葉杖やつぎ鳥居へたぎり着き  
 試験前密柑の筋をみんな取り  
 お前はネ死んで幸福かもしれぬ  
 バリトンが馬鹿々々々々鳴つて居る  
 浴槽に資産家らしい顔はなし  
 稻荷下け白い着物が汚れて居  
 新妻のいつ知つたのか誕生日  
 怒りわが身にもぎるゆゑうつつ  
 名門のこさは一人倍の智慧なりし  
 死のうきは一人倍の智慧なりし  
 悲しみのほゝ笑みそなたのぬくみ  
 亡き人の爲めに草花蒔いて置く  
 いそがしい中に忘れためしを食ひ  
 生憎なだがおまへも働く女だなア

登ヶ池 大 阪 同 島 根 大 阪 京 城 大 阪 芦 屋 大 阪 島 根 別 子 大 阪 同 同 金 澤 大 阪 愛 媛 大 阪 大 和 島 根 大 阪 神 戸

明 治 天 仰 一 騎 君 遷 凸 瓢 凡 二 樓 太 郎 坊 花 情 空 山 鯉 友 水 一 坊 風 來 好 次 大 愚 圖 坊 勝 二 勝 二 良 夫 一 柳 柳 大 阪 神 戸

職が無く坊主の氣にも成つて見る  
 純眞の主張へ馘首が手を擴け  
 リンゴむく指の白さをじつと見る  
 パスガール國の訛も出してゐる  
 就職の話の火鉢炭がなし  
 義理の母たしなみと云ふ年でなし  
 門口で早や留守事の一つ知れ  
 住めば都さ老母を安んずる  
 解禁のなんのこ長屋知らぬ事  
 荒み切る心の糧へ酒場の灯  
 手荷物も色氣まじつて肩にかけ  
 まて帽子金解禁で安くなる  
 ようやつと話がついて粗茶が出る  
 朝歸り女房不思議に素直なり  
 子が死んで泣いては居れぬ日を過ぎ  
 雀斑故の厚化粧も淋しくて  
 共産黨つまらぬ人が名を揚げる  
 さていよくドングマリ之夜となり  
 麥飯を先生自慢らしう食べ  
 努力した程焚火へはあたられず

豊中 神戸 京都 大阪 高知 大阪 愛媛 鳥取 奈良 吳 大阪 奈良 豊中 東京 大阪 同 島根 東京 兼二浦 大阪  
 不 朽 空 風 潮 多 樹 光 蝸 牛 四 五 磨 佳 水 佳 柳 青 人 仙 掌 汀 月 蚊 郎 土 佐 雨 月 南 生 喜 由 一 郎 春 夫 花 夢 黑 天 子

満月を背負へば故郷はごちらです  
 何か云へば出戻りの姉泣きそうな  
 ビラ配り貰ふてやればそれでよし  
 相槌は年取つたのが打つてくれ  
 神經も風もさがつた暮を病み  
 親の眼に皆贅澤なものばかり  
 ままつ子のぬぐ山桐はよく揃ひ  
 初産がおしめの丈を聞きに来る  
 料理する意氣で床屋は剃つてゐる  
 就職をしてさ縁談延ばされる  
 無心かさ讀めば嬉しいたよりなり  
 生きやうさすれば保険屋か言はれ  
 五六戸の家主値下におびへてる  
 わけも知らずに泣いた子の母怒り  
 實<sub>ニ</sub>行が出来そ<sub>ウ</sub>もない社則見る  
 病妻の只指輪だけよく光り  
 抱ききれぬ兒を子が抱いてゆく  
 萬金丹ケーブルカーの上で買ひ  
 奈良はよし金解禁をよそに暮れ  
 恥かしさのすしが半分残つてゐる

朝鮮 救命  
 京都 十變  
 神戸 不<sub>レ</sub>然  
 神戶 大<sub>ニ</sub>鶯  
 松山 紫<sub>ニ</sub>電  
 大阪 聽<sub>ニ</sub>松  
 鳥取 樂<sub>ニ</sub>鳥  
 大阪 樂<sub>ニ</sub>泉  
 別府 豐<sub>ニ</sub>泉  
 大阪 笑<sub>ニ</sub>四  
 大阪 虛<sub>ニ</sub>白  
 大阪 喜<sub>ニ</sub>天  
 吳 光<sub>ニ</sub>哉  
 大阪 炭<sub>ニ</sub>車  
 大阪 不<sub>レ</sub>忘  
 福岡 帆  
 松山 青<sub>ニ</sub>帆  
 兵庫 香<sub>ニ</sub>仙  
 京都 垂<sub>ニ</sub>月  
 兵庫 陽<sub>ニ</sub>春  
 大阪 子其改め 鬼堂  
 同 忌 樂





# 素

私が前田でございます。實は暮から持越しの風邪で、本日の會にも御邪魔出来るかどうかを危ぶんで居りましたのですが、安井君から度々の電報に退引きならなくなり、出て参つたやうな譯で、お話し申しましても全く何の用意もないので、御覽の通り「素」といふ演劇で、こゝに立ちましたのでございます。この素といふのは「素手の」素、「素からかん」の素でつまり全く白紙といふ事であります。白紙で何かを語らうといふのでありますから、餘り御期待は頂けないと思ひます。さて川柳家として白紙にかへつて何かを考へて見やうと致し

## 本社新春句會席上講演

### 前田雀郎

ますこ、先づ浮かんで参りますのは「川柳は何ぞや」といふ疑問であります。川柳家の皆様の前で、今更らしく川柳は何ぞやなきと申しますのは、いさゝか馬鹿けて居りますが、しかし「川柳だから川柳だ」といふだけでは、さうも私の腑に落ちて来ないので、それを皆様に御一緒に考へて見たいのであります。一體川柳は何でせうか。川柳が前句附にはじまるといふ事川柳は前句附の點若柄井八右衛門の名を採つたものであるといふ事は、私も承知して居ります。しかし川柳といふものゝ持つ詩境、言葉をかへて云へばその風流といふものまでが、柄井

川柳の發見創造にかゝるものでありませうか。私は第一これ  
を疑ふのであります。

もしも川柳の持つ風流といふものが、川柳翁出現までは日本  
に未發見のものであつたごしますならば、私共が川柳翁以前の  
『武玉川』其他の俳諧の中に、川柳を感じるこいふ事は、誠に  
可怪しい話であります。しかも私共は疑ひなく『武玉川』を川  
柳として語つてゐるのであります。これはさうしたものであり  
ませう。私共はこゝに川柳の持つ風流といふものは、川柳以前

既にあつたものご考へなければなりません。つまり川柳は前句  
附を機縁として、さういふ風流を民衆に植つたのであつて、  
決してその發見創造者ではなかつたご考へられるのであります  
ではその風流は何處から來たか、皆様ご共に考へて見たいのは  
こゝであります。が、幸ひに獨斷を許して頂けますなら、私は  
それを、前句附の向ふにある俳諧からだご申し上げ度いのであ  
ります。

今日、俳諧こいふやうな事を申しますご、直ちに芭蕉のそれ  
が聯想され、寂ごか風雅ごかいふやうな思想を持つものでなけ  
れば俳諧ではないやうに考へられて居ります。従つてかういふ  
私の説は甚だ異に聞えるかも知れませんが、しかし寂ごか風雅  
ごかいふやうな思想は、俳諧に於ける芭蕉の風流であつて、決  
して俳諧そのものご全き姿ではないのであります。芭蕉のさう

いふ風流以外にも、俳諧の世界には、『まごこ』をその思想ご  
する鬼貫の風流、『自由』をその思想ごする西鶴の風流なごが  
嚴然ご存在してゐるごを、私共は知らなければなりません。  
たゞ芭蕉が餘りに偉大であつた爲め、鬼貫や西鶴等の風流はご  
もすれば人々から忘れられ、つひに芭蕉の風流のみが俳諧のそ  
れであるかの如く後人から考へられるやうになつたのでありま  
して、芭蕉の俳諧こいふものは、つまりは俳諧の一つの姿に過  
ぎないのであります。

芭蕉は、俳諧こいふものご達し得る一番高い所へ登つた人ご  
であります。しかしこの境地は芭蕉にして始めて達し得たので、  
よく他の追従を許すものではありません。ごしましたならば、  
さういふ特殊な俳諧ごは別に、何か他に、芭蕉の俳諧の土臺ご  
もなり、又鬼貫や西鶴等の俳諧の土臺ごもなつた無垢の俳諧、  
云へば眞面目の俳諧こいふものがなければならぬ筈だご思ひ  
ます。私が前に申しました川柳の中に流れる風流ごは、その眞  
面目の俳諧の持つ風流をいふので、決して芭蕉の俳諧のそれを  
指すのではないのであります。

眞面目の俳諧の持つ風流ごは、即ち俳諧の大道を一筋に貫く  
『素』の風流であります。俗人の俗腸を流れる飾り氣のない一  
つの風流であります。私はこゝに於いて、俗人の俗腸をそのま  
ゝに吐き出した川柳の風流こそは『素』の風流であり、それは

また實に眞面目の俳諧の姿を傳へるものであるを考へるものでありますが、如何でございませう。

先月のある雜誌にぎなたかが「川柳家が俳諧を云々するの道樂が強い」さいふやうな事を書かれてゐたやうであります。私はその説に賛成をしかねます。ものごさいふものはその大本を極めずして正しい發展の出来るものではありません。今日川柳が行き詰つた云はれてゐるのも、今までの川柳家が、その大本を極めずして、既に川柳さいふ出来上つたものを對象に餘りに川柳の爲めに川柳して來た結果でありまして、俳句が芭蕉の聲色の爲めに行き詰りを生じてゐるのと同じであります。

古川柳は私共の川柳の始祖であるのに違ひありません。しかし古川柳は實曆の江戸の民衆の中に發達したものであります。

その爲めその風流は、當時の時世粧を多分に反映させて居ります。さういふ古川柳の姿を、時代も思想も違ふ私共がそのまま承けついで、その中に、心にもない實曆の風流を眞似やうとする、川柳に命が無いのは當然であります。私共の先輩は古川柳の中から大切な素の風流さいふ萬代不易の精神を發見せず、たゞ表に現れてゐた、一時の花に過ぎぬ實曆人の風流のみを把らへて傳へたのであります。これでは行き詰りの生じないのが寧ろ不思議であります。何にも染みぬ私共日本人の魂の底を流れる素の風流を土臺として、その上に常に新しい私共の今日の

風流を盛つて行つたならば、決して川柳に行き詰りなきさいふものを生じる譯はありません。

今日柳界には、傳統とか革新とかいふ事が大分云はれて居りますが、革新とは傳統に立脚して始めて行ひ得るもので、傳統を切り離した革新なきさいふものゝあらう筈が無いのであります。さういふ一派の方々は、氣持になつて、太陽よ、地球よ、資本家よ、兄弟よ、叫んで居りますが、一體何を革新しやうといふのか、私には想像することが出来ません。勿論革新派の名乗る團體も澤山あり、全部がさう申す譯ではありませんが、多くの方の作品を拜見しますのに、大抵は智覺の遊戯、つまり頭でばかりこしらへ上げたやうな句ばかりでありますのを見る、これは昔の智覺の遊戯であつた狂句を革新しやうとして居るのかも知れません。例へば

吉原が明るくなれば家が闇

さいふやうなのを、吉原では古いとして、やれ太陽のカケラだとか地球を蹴飛ばしたださかいふやうに、今の流行語に革新しやう云ふのであります。私はそれを疑ふのであります。眞に川柳を革新しやうさいふのならば、小手先でなく、もつと精神的であり度いと思ひます。

詩は申すまでもなく智覺の遊戯ではないので、何處までも感情に従ふべきものであります。かうして考へて參りますと、川

柳を正し、感情を表現したものに、この詩の風流の大本を、探つて、今まで川柳の上に覆ひかゝつてゐたいろくの、不純なものを排さうとしてゐる私共の運動こそ、寧ろ眞の意味の革新派かも知れません。

芭蕉も「情より姿を先にすべし」と云つて居ります。これは句をつくるのに先づ自分に色氣があつてはいゝない。自分の氣持は眼に映つたものに従へまいふので、川柳家が、川柳は江戸のものだからさか、皮肉なもの、粹なもの、通なものだこいふので、テンから江戸がつたり、粹がつたりしてはいけないといふのであります。もつこ「素」にかへつて句をつくれこいふのであります。しかしかういふ病氣は、ひゞり川柳界ばかりではないやうで、俳人が今更らしく一茶を探し出して珍らしがつてゐるのなごは、多くの俳人が、自らさういふ病氣の患者である事を證明してゐるやうなものであります。私共川柳家から見れば、一茶の出現は少しも不思議ではなく、多くの俳人が芭蕉の風流を模倣に日も足らぬ中へ、一茶がヒョッコリ素の風流を抱いて飛び出して來たまでゞあります。一茶の俳諧が川柳に近いと云はれて居りますのを見て、素の風流とはどんなものか、お判りの事と思ひます。

この事に就きましてはもつこ申述べ度い事もございいますが、今日は講演ではなく、皆様と共に何かを考へてゐるのであります。

すから、これはいづれこいたしまして、今日はたゞ、私共はもつこ「素」な心になつて句をつくつて行かうではありませんか。こいふ事を、御相談いたしたいのであります。これは川柳だこか、いや俳句だこか、いふやうなケジメを云はず、眞面目の俳諧にかへり「素」の風流に遊び度いのであります。かうしますれば、川柳は行き詰りなごを招かず、いつも新しく、その世界はいよく開けて來やうと考へるのであります。何の用意もございませぬ爲め、言葉甚だ亂れ、意を盡さなかつたかと思ひますが、そこはお察しを頂てゐして、これで御免を蒙ります。

(昭和五年一月五日夜、於日本橋俱樂部安西杏三筆記)

## 社 告

本社同人 冷刀 矢出俊一君 (仁川支部 幹事)  
永々病氣の處樂石効無く去る 一月  
十六日遂に永眠致され候に就ては  
生前辱知諸君に謹告候也

一月 川柳雜誌社





# 大空から

安井ひろし

『川柳雜誌』の新年句會に、東京から  
態々前田雀郎氏が來會されて、意義ある  
講演（別項参照）をされた事は、單に『  
川柳雜誌』同人の喜びのみでなく、柳  
界の盛事だと思ふ。今後は大阪からも東  
京に人を送り、東西呼應して柳界に呼び  
かけ、その進展に資したいものと思へる

前田氏の『川柳雜誌』新年號に述べら  
れた「十七字への惧れ」は自由律派俳人  
に對して、最も重要な點を衝き、定型  
律派俳人の未だ述べ得ざるころの、因  
習によらざる定型律の重要さを述べてあ  
ますころがない。俳壇が川柳界より教  
へらるゝころ多かりしを思ふ、從つて

俳人諸氏からの反響も可成多かつた。然  
して川柳界に於てもまた味はふべき研究  
たるは勿論である。こうした本質的な研  
究家の少い柳界に於て前田氏はその眞摯  
な態度のもこに今後本誌で大いに筆陣  
を張らるゝであらふ。

『氷原』新年號紙上の『新諷詩』して  
の川柳——川路柳虹氏は柳壇外の人と  
して川柳に對する正しい見解を示してを  
らるゝ。『氷原』系の諸氏がやゝもすれ  
ば川柳さういふ特殊な短詩を、生硬な文學  
論の直譯によつて、理論づけようさされ  
るころに川柳の持味を失ふ恐れある點

を指摘され『川柳詩』しての本質がサタ  
イアの詩境に中心を置く事を私は門外漢  
としてもつゝ強調したく思ふ』と述べら  
れて居るのは川柳を理解する文壇人の新  
川柳に對する意見を代表して居る。

『氷原漫語』に於て『川柳雜誌』を多々  
だこいつて居るが、屢述べるように『  
川柳雜誌』は同人の主張を強調する同人  
雜誌ではないのである。川柳界の代表雜  
誌なのだから、その點、發行當時の趣旨  
からいふもあらゆる柳界の傾向を一誌に  
展開させて少しも差しつかへないのであ  
る。然しながら『川柳雜誌』が柳界の進

展について常に指導的態度をこつてをる事は、毎號の月評等についてみるも顯著な事實だと思ふ。

主幹が決して俗化なきしてをらぬ事も發表句を含味されるなら當然うなづかれなければならぬ筈だが、一面主幹の句は主幹の句であり、同人の句は同人の句であつて、各人が各人の境地の句を示して行くところに、個性尊重の意義があるのである。

我々は所謂新興川柳を柳界の最尖端にあるものとは思はない。吾々の一部の人は過去に於てすでにその道を超過して居るのである。歐米を知らずして日本のみを賞むるのミ、世界を歩いて來て尙日本偉大なり云ふのミは雲泥の差がある、所謂新興川柳なるものを川柳の一分流として経験し、それ等を川柳の圈内に抱容せることから「川柳雜誌」は出發して居るのだから「氷原」の中間派呼ばはりはむしろ滑稽に類する。

詩の世界は「スポーツ」ミか「勝負事」ミ違つて相手を取さなくとも、立派に自己を樹つる事が出来るのである。完全に他を認め然して自らを示し得る詩の世界に、徒らに他を忖度し己のみを高きとする態度は「氷原」自らが「きやり」に對して云ふ自家撞者を表白するものではないか。我々は繪畫のあらゆる流派が存在する如く川柳のあらゆる傾向を認めるたゞそれらが各々、銳鋒を示し、柳界のレベルを高め行き、川柳圏の擴大するを望むものである。

「きやり」新年號の「自らを試める些細な言葉」——川上三太郎氏は「川柳雜誌」創刊の主旨を合致する。横の宣傳こそ「川柳雜誌」の社會宣傳の趣意である。然しながら矢野氏の「岡辰押切帳」をもつてその範たらしむる點には遺憾ながら賛しかねる。即ち「押切帳」は民衆の最も卑俗な金儲け心理に媚びたものである

に反し、川柳は民衆の精神生活をして向上せしめる指導的立場を採らねばならぬからである。單に川柳に心を惹かれるミいふ點のみを高調するミ、ついに川柳の在來からもつ卑俗性をより伸ばす事となり遂には川柳の墮落を誘引するに至りはせぬかミ危むものである。

川柳は大衆に媚びてはならない。大衆をして自覺せしめ、向上せしめ、率ひなければならぬ。そこに川柳の民衆詩としての價値があるのである。

「きやり」が「京濱川柳家落語人物見立」を掲載して居るが、あゝした記事は直接その人を知り、性行を知悉して居るものには興味があり「いかにもよく云ふてある」ミ感嘆を惜しまぬであらふが、直接人物を知らぬ者には、その見立が、句の上の印象からでないため何等の感興を呼ばぬであらふ。殊に柳人ミ落語ミつた卑俗的な取扱方が常に柳界を誤つて居る點に及ぶなら寒心に堪えない。



月 評

# 卓を圍んで

紋太、ひろし  
革郎、亂 耽

近作柳樽 ひろし提出  
手を出せば虫方向をかへてとび

今 雨

ひろし……句意は手を出したら、虫が方向をかへてさんと云ふのであらう。常套的な川柳の様に思ふ。虫に對してある親しきみを持つてゐるらしい作者の氣持が、纏つてゐる様ではある。

紋太……上五がどうも不似合の様に思ふ。この手が虫をさうさとして出した手か、この手に來たれと云ふ様な氣持で、出した手かど判然としないと思ふ。普通であれば、虫をとらうさとして虫に近づいた手であらうと思ふ。それではその場合には、不似合であると言ひた

い。  
革郎……寫生句の様であつて、實は自分の心境を詠つた句だと思ひます「手を出せば」と云ふ事は希望を象徴してゐるし、運命を「虫方向をかへてさびで」表してゐる。つまり皮

肉な運命と云ふ事をこつした表現法をかりて詠つたものと思ひます。

ひろし……革郎氏の解される様に、解するに非常に暗示的な句になる様であるが、作者の意はさうではない様に思ふ。「手を出せば」は虫をさうさ云ふのではなく、たゞ散歩してゐる人が懐手を何の氣なしで出したら、虫があはて、方向をかへてとんだと云ふ様な所に興味を感じたのではないかと思ふ。つまり無意識な仕事か、虫を驚かした所に面白味を感じたのではないかと思ふ。

革郎……次の句の「氣休めの醫者の言葉はずぐ信じ」と云ふのを見て、作者は病身な人に違ひないと思ふ。又同じく「苦勞せうのため長壽でないものを」といふ句を見れば、この人の生活が決して、樂でないこと云ふ事がわかる。この環境にある作者の句さして考へる場合、ひろし氏の既には賛成出来ない。この「手を出せば」は懐手を出すと言ふ様な意味

ではなく、ものを掴まんとする手であると思ふ。この虫が道端の虫ではなく蟻の様な一定の方向を指して進んでゐる。虫に人間が手を出した場合に、虫の方が手をよけて行くと云つた、つまり大きな力に無抵抗に生きて行くこと云ふ諷刺と云ふか、或いは達觀と云ふかさう云つた自分の生き方を句にしたもので、所謂長いものには巻かれると云ふ諺と同じ、行方だと思ふ、この虫が蟻でないことは「さび」でわかつてゐるがさう云つた事を詠んだ句の様に思ふ。觀方は私の前の觀方さ二様にされると思ふ。

紋太……僕は押さへれば世はなせばきりぎりす」と云つた式に、虫をとらうとすれば違つた方へさんと云ふ極く簡單な意味に解してゐます。深く解する事も差支へはないが私はその句が自然に深く解さればならぬものを與へられた時にはその通り深く解しはするけれども、この句の場合に強いて暗示的に解するものがないと思ふ。  
亂耽……僕は革郎氏の解に同感です。

## 喜劇役者の不機嫌な空だ

春 夫

革郎……映畫の喜劇俳優のロケーションの日の天氣模樣が悪く、陰鬱にごんより曇つてゐる。笑ふならぬ、無理矢理に作り笑ひをしななければならぬ。職業と天氣の關係を詠んだ句と思ひます。  
ひろし……作者赤木春夫は假名で、文筆を業としてゐる僕の友人です。スツヂオに關係を

もつてゐるので、この日も撮影所へ行つたのだらう。不斷輕快な喜劇俳優がその日餘りの機嫌でなかつた。云ふ其感じを詠つたものだらうと思ふ。私の前に作つた「山崎が三振を續ける陰鬱な空だ」と言つた様な「空だ」で、その憂鬱な氣持を曇つた空によつて表現してゐるのだと思ふ。

紋太：「僕はかなりいゝ句だと思ふ。しかし結構の「空だ」が只曇日を言つたのみの感じのするのが惜しい。僕は最初喜劇役者さ云ふ言葉がヒエロの様な男を指してゐる様な氣がしたしかし映畫俳優と聞けば、この句の何處にも隙のない叙法であると思ふ。只今云つたこの句の焦點を持つて來た「空だ」がぼんやりとしが受取れないと思ふだけだ。

革耶：「私は「空だ」の「だ」の句は非常に力強い句になつてゐると思ふ。

紋太：「言葉として強い言葉だが、その空を思つて見るさきにも足りないものがあると思ふ。

亂耽：「僕は革耶氏の「だ」と言ふ一字に千鈞の重みを感じる。紋太氏の所謂もの足りなさか「だ」によつて漠然とある焦點を掴んでゐるさと思ふ。この句を一見すると非常に自由に云はれてゐる事に敬服する。そして後駒と前駒との對立關係からこの句も確かに川柳ださ云ふ事を感じる。即ちこの句の後に「秘かに穿ちが顔のをぞかせてゐるのを感じる。ひるし：結局この句は非常に自由に詠つてゐると言ふ點に價值がある様に思ふ。川柳の持つ特質がかうした自由さにあるのでは

ないから。

紋太提出

### 青年團皆ラツパ手になるのらし

千春

紋太……この句を讀むと夕方近くなつても未だ町の何處かでラツパを吹いてゐる數人の若者がよくある事を経験する私の頭に、その情景が浮んで來る。そして色々な人間の世話を他にラツパを吹いてその日が經つて行く氣持を淋しく感じさせる。

ひろし……微笑を以つて、讀める輕い句である。世の中の苦勞を知らない若々しい軍國主義の明の邪氣のない所が出てゐるさと思ふ。

革耶……私は青年團のラツパに惱されてゐる作者が、もうやめるかと思ふのに何時迄も根氣よく吹き續けられるに憤慨した。抗議の句だと思ふ。それでなければ「皆ラツパ手になるのらし」が意味をなさなくと思ふ。

亂耽……僕は「なるのらし」でこの作者の若い者に對する諦めた様な、一種の弱々しい反感が出てゐるさと思ふ。その點で革耶氏と同意見である。この川柳を見るさ、とらはれたる川柳と云ふ事をよく感じ、前の喜劇役者の句からは、今後伸びて行く川柳の萌芽を見る事を嬉しく思ふが、この句から何の感度もなく古句の殘骸をたゞ現代に生じただけの感じしか持たぬ。

紋太……無論迷惑を感じての句ではあるけれど、抗議さか反感と云ふ氣持ではなくて輕い氣持の批評と云ふ程度ださ僕は思ふ。落ちついた穩かな氣持であるから、自然伸びる

餘地がないと見られるのであらう。

ひろし……つまりあの若い奴等は氣樂な奴だ、皆ラツパ手にもなるつもりかいさ云ふ様な輕い微笑で聞いてゐるのだと思ふ。しがしこうした句の生命が、永遠的なものでない事は亂耽君の云ふ通りであらう。

亂耽……古句の殘骸と云つたのは、この句が決して存在價値がないと言ふ意味ではなくて、無論永遠的な生命を持たない事も明らかであるが僕はたゞこの場合少しも進展しない過古の姿を見た嫌惡を述べたに過ぎない。この句として確かに現代社會の一部を見つめてゐる點では存在價値が充分あると思ふ。

革耶……川柳の行方として、かうした社會諷刺さ云ふ行方は古いと云へば古いであらうが、川柳の持つ特徴として慥した皮肉を句によつて言ふさ云ふ事は永遠性があると思ふ。

江戶時代に幕府の壓制に對し、川柳の形式を以つて、町人が抗議を云つたのと、現代の軍國主義に對しかうした表現法により抗議を言つたのとは同じ事であり、世の中が如何に進歩しても社會の不正が除去されることは思はない。これに對して川柳の形式をかりて抗議を云ふさ云ふ事は可なり、今後も行はれるだらうと思ふ。唯、この句が弱いために抗議さまで感じられないまでの事であつて、それは表現法の拙い結果で、かう云つた行き方は、永遠性があると思ふ。

ひろし……川柳の本質的な要素の一つである諷刺が永遠性がない等と言ふのではない。たゞ、かうした表現形式が、過去のものだと言

ふのである。

紋太……この句に永遠性があつかないかは僕にはなんとも言ひ得ない。僕としては批評さして低級かはしれないが、感じたまゝを述べるだけである。それが無論今の僕には佳句として受入れられる。出来る。

川柳塔 亂耽提出

時雨に消えてしまつた一と村

たけし

亂耽……鳥致圖的な描寫で軽く叙してある點が第一に好いと思ふ。更に思想的に強いて句の裏の意味をとらうとすれば、資本主義の魔手のために生活の安定を奪はれた、一村と言ふ様な意味にも解することが出来ると思ふ。これは勿論僕自身の解釋であつて、作者がそんな意圖で作られたかどうかと云ふ事はこの句だけでは斷定する事は、或ひは輕卒な解釋かも知れないけれど……

紋太……こんな句にもさう感ぜられませんが驚きました。僕は第一に簡にして明らかな叙法に感心しました。たゞその情景が自然な詠つてあるだけに餘りに靜かな氣持である事に多少讀んで淋しく感じた。私の趣味で行くさ「時雨に消えてしまつた一と村」さ句意をかへた方がピンと来る様に思ひます。この句はこの句さして好い句だと思ひます。

革郎……この句は一と村で生きてゐるのだと思ふ。一と村が消えてしまつた云ふ事は非常に誇張された叙法の様に感じられて、紋太氏は一と群と訂正した方が好い様に云はれたのでせうか……

紋太……いえ、僕の一と群は群集さ云ふ意味であります。つまり原句に反します。さうした方が例へば映畫さ實寫さ物語ほどの興味の相違が生じるだらうと思つた。原句を悪いさ云ふのではありません。

革郎……群集さ村さでは丸で感ぜが違ふ。時雨に對して村と持つて來た所がこの句の生命だと思ふ。

紋太……だから僕の注文として問題外にしておいて下さい。

革郎……私は横山大觀の片ばかしと云つた感じがこの句から感じられます。豪壯な句として寫生句としては上乘なものと思ひます。これを亂耽君の様に資本主義に生活の安定を失つた村なぞ、解する事は出来ない。

亂耽……僕は勿論さう云ふ事はわかりきつて居る事だから後で云はれるだらうと言ふ事を豫想して強いてこの裏の意味をさつたまでのこまで、それが僕のドラマである事は既述の如くである。

紋太……さうだらうと思つてゐた。

亂耽……僕はこの句から太い二本のうすい墨色を感じる。そして又かすかに人の子の氣配さ感ぜられる。灯の明滅も眼底に浮はす事が出来る。概念の曝露の様なものが多い四字詩の中で巧く纏めてある點は、諸氏と同じく同感で感服する。

革郎……僕はこの句は夜の句でなく晝の句だと思ふ。亂耽君の説には賛成しかれる。

亂耽……僕が灯云々と言つたのでそれが恰も夜の句の様に誤解された傾きがあるが、そ

れは私の夢であつて、この句から更に浮ぶ所のその村の一つの虚像を云つたまでの事である。

ひろし……作者たけし君の 近江の閑寂な生活をよく出してゐると思ふ。たけし君の宅には屋上に硝子張のサンルームがあつて、その藤椅子に腰かけて時雨でくる情景を見てゐるたけし君が目に見えて、ふより繊細な蕪村の墨繪の様な氣持である。無論一村でなければならぬ。そのサンルームから見渡す所には、所々かたまつた一村づゝが遠近に見えるのである。極く素直に時雨で來た所を寫生した句だと思ふ。強いてこの句を他の寓意にとるならば、それは寧ろ戀の氣持さ見る事が出来る。たけし君の抱いてゐる戀の一つが消えかけてゐると云ふ事は、僕が知つてゐるのさ、同時に發表されてゐるさうした句から感ぜた事であるが、さう云ふ風にとらずに靜かな生活を、この句に表はしてゐるさ取つていゝと思ふ。

紋太……解し方は自由だから、それで差支がないと思ひます。私もたけし君が近江八幡の人だと聞いてゐましたから、この句を讀んで湖畔の美しい情景を思ひ浮べました。日本畫より一步進んだ表現が欲しいと思ふ、感じがしたのである。

革郎……この句が豪壯な感じがあると云ふのは「消えてしまつた」さ云ふ中詢からうける感じであつて、「一と村」さ云ふ表現法が云ひきつた表現法があるので、繊細な感じはない。

ひろし……時雨は佳しいものとさされてゐる  
「滑えてしまつた」と云ふ云ひ方はたけし君  
の持つ若さから來てゐるのであらう。遺瀨な  
い氣持を持つ若者の感情が出てゐるのであ  
る。

ひろし提出

### 見えぬ眼の親に絹糸柔かし

久水

ひろし……「盲目の親に絹糸柔かし」ではこ  
れだけの感激が出ぬであらう「見えぬ目」さ  
した所に技巧がある。不具な親に對する愛情  
がよりよく出てゐる。この親は私には母親の  
様にうけとれる。

紋太……僕も母親だとは云ひきれぬがその  
様な氣がする。どんな場合であるかも知かり  
兼ねるが、兎に角暖い子の心持ちがその絹糸  
を生々通つてゐる様な感じがします。

革耶……私は少し違つた解釋をしてゐる。  
見えぬ目の親に對して絹糸柔かしと云ふ意  
味は目の見えないもの、常として僻み根性  
をもつてゐる。それで柔かき絹糸を贅澤視し  
そんな金があるならもつと自分で發行して  
くれと云つた、目の見えぬ親の愚痴、僻みさ  
云ふものが感じられる。それでなければ「絹糸  
柔かし」が何のためにつけられたのか、わか  
らなくなる。

ひろし……並べられた句「貸家札住みやすそ  
うな陽が當り」身に餘る光榮の手が油染み  
と云ふ句を見るも、或ひは革耶氏の言はれた  
母親に對する自分のいたらなさを己の貧し

さから濟まなく思つてゐる様にもとれない  
事もない。しかしこの句の讀み下した、なだ  
らかな感じは、さうしたのもより親を愛す  
る感情の方がより濃いと思ふ。

紋太……成程字句の上から解すると、革耶氏  
の様にこそ読めますが、僕を上から讀み下して  
上半すでに温い氣持を覺えるので、下半の絹  
糸が子の手から親の氣持通りのものを受  
取つて満足をしたと云ふ感じを感じたので  
す。たゞそれだけだがそれが、どんな場合であ  
ると云ふ様な事までは、判然と私の頭には出  
て來ません。この絹糸が絹物と云はないで糸  
である所にどうもさう思へてならぬのです。  
この句の出來た場合はどう云ふ時であつた  
のでせうか。

革耶……絹糸は絹と云ふ事を直截に言はず  
恰も盲目を「見えぬ目」と言つてある様に、絹  
糸と言ふ言葉によつて絹物と言ふ感じを出  
してゐるのだと思ふ。そして此句の様な「し」  
止めの句は可なり強い意味を表してゐる様  
に思ふ。それで前述へた様に親の僻みさ解し  
たのである。

ひろし……この「絹糸柔かし」はさうした物  
ではなくて子の温い感情を絹糸柔かしと  
表現したのではないかと思ふ。即ち紋太氏の  
子の愛情が、この糸に傳つてゐると云ふお説  
と同じわけである。

紋太……革耶氏の反對に盲目の親が絹物を  
着せてもらつて、そして愛撫してゐる氣持さ  
さつても取れぬ事はないと思ふが、しかし僕  
としてはひろし氏と同じ様に漠然と子さし  
ての愛情を感じはするが、その場合判然と受  
けられない。

革耶……さう解するには下五の「柔かし」か  
ら受ける感じが餘りに堅すぎはしないかと思  
ふ。(鳥陸聖郎)

### 合本と殘本

本誌の合本が總布製美麗表紙附(金文字入)で書架を飾るにふさはしい簡素な装幀に出來ました。

第一卷 第二卷 各金五圓也

第三卷 第四卷 各金參圓也

第五卷 第六卷 各金參圓也

當分第五卷 特價金壹圓五拾錢

巻に限り 送料十八錢

尙古い川柳雜誌御入用の方に(は特に左の値段で御頒ち致します。いづれも下記宛御申込下さい。

第二號より第四十七號まで

各一部 金拾錢

第四十八號より第七十一號まで

各一部 金貳拾錢

(但し一號九號十二號廿一號廿五號卅六號卅七號はありませぬ)

川柳雜誌社事務所



# 川柳塔

○ 竹内多聞

死ぬ人の羨ましくも十二月  
鍵孔で吾れも見られてゐる一人  
けなるさは泣きやんですぐ眠られる兒  
催促の鼻をかむまをホツミする  
叱られる女房さならば安からん

○ 住田亂耽

會社さの折合ひつかず家鴨なく  
搾取される事に膝まで泥々だ

1930年の十日戎に (二包)

人間の慾へ聳におはしまし  
ませたさも言へず十九の藝者かな  
九軒の或るガールたちへ (六包)

白粉に深くかくれて松の内  
さびしくも處女ミ個性をうばはれし  
人形に等しく三味もおほつかな  
短冊をもろた話を藝者する  
不可思議を女の髪に見出しぬ

○ 彼女へ (二包)

くちびるをゆだねし後の眼を見まじ

○ 安井ひろし

○ 緊縮の春 (二包)

龜の子の正月ぞうたてき

○ S 嬢 (三包)

横縞の赤の羽織にだまり勝ち  
鼻筋のにきび氣にして大晦日



餅焼く手つきも色街の人

十二月十日社民黨脱退

プロの誇を黙禮に袂れ

一月十五日全國民衆黨結成

潮鳴る階級性に呼びかけん

○ 松盛 琴人

なんのさ若い元氣出したり

酒さろり先づ元旦は味覺から

泥棒へ頓智の後がちこ不氣味

幸福を裏切る様に黻が出来

心の黻へ水のほしさよ

黎明は山をさつかさおいて行き

ハツキリ朝へ抱かれし梢なり

○ 伯母の臨終

生死のすきをかすかなる息

○ 伊藤 綠之助

ねころべば帯の弛みへ風が這ひ

金持の息子ほんきに惚れられる

さろくに燃ゆる心で死を呪ふ

浪人ですよき日中遊びに来

母の齒の鐵漿黒々さ松の内

○ 出口 雨町

人一人殺した牛がほかんさ居る

人間の白齒を見ればぞつさする

遊んでるやうに言はれて腹をたて

脱稿のあさ一枚に手をあぶり

履歴書のたゞみ方にも氣をつかひ

性格をまけて頼んだ甲斐もなく

死ぬ程の戀が喜劇にされて居り

自重して居れば他人に先立たれ

病人の粥を子供が喰べたがり

嬉しさは戀がかなつた割烹着

○ 川合 舟々

怒つてる事をさうして知らせやう

まごころころお禮は待つて下さい

禮を忘れて愚痴にさはなりぬ

○ 伊藤 愚陀

母に獻す 三三

のぞいてくれな母よこゝろを

たゞ寝るばかり母よ極樂

二十一バットの煙ばかりなり

ぢつさ女の手さ金の音



亂すまい亂れまい女心のほのかなり  
別れごもない袂の赤さよ

○ 水谷 鮎美

おしろいの句の夜さなりにけり  
聲高に言へば鮮人かご思ひ  
落籍されて色のくろさがわかるなり  
片戀かしらんご空をながめるる  
陽のなかにプロレタリアの爪の垢  
雲水の湯呑みにこもる人の呼吸

○ 岩崎 柳路

東海道線にて  
山北から後押をする天下の嶮  
三島から水車の流れ美しく  
沼津驛牧水の詩をふご思ひ  
淨るりご丸切り違う大井川  
關ヶ原今紡績のけむが見へ  
エプロンの妻は身重になつてゐる  
だましたらおこりますかご知れた事  
歸省する手にぶら下けたわさび漬  
二十日鼠のやうな男で儲け得ず  
白粉の香がまだ残る掛布圍  
宿帳へ我が商賣を考へる

○ 朝田 新水

人情が南へ持つて行きたがり  
家計簿へ今年の暮の節約さ  
ほろ書生時代もあつた署長なり  
ゆすられる男チウインガムを嘖み  
小商してゐる無沙汰を母が詫び  
呑めごいふ父に遠慮をしては酌ぎ  
不景氣がたゞる主家ごなりにけり  
松の風歸れば家に吹いて居ず  
空の景色に雁の一系列  
凧揚げて遊んだ頃は明治なり  
あき性のくせに妻には負けてゐる

○ 松丘 町二

話な かの冬の月みる  
猿ばかりゐる風景の都會音  
醫者を迎へに眞夜中の霧  
冬の夜の唇ばかり乾ききり  
坐食してしやうごごなしの愚を守る  
病人の耳をみてゐてをかしくなれり  
をろかなからだへ灸をすゐてる  
笠の霰の足の甲うつ

酸味ばかりが残されし戀  
憶良らを羨む梯子酒が醒め  
失業の齒ばかり白しうら寂し  
をろかさは心にかける金の高  
坐食して耳の掃除が行届き  
うてば響く我を信じて疑はず  
逆境に處して寂しや眼が尖る  
はかなき望「冬來りなば」

○ 橋本 綠 雨

たのもしい人だも盃もたされる  
遠乗りで新築を見に來た姿  
マントの重み小料理屋を酔ふて出る  
同情はするはく、さ女なり  
さほつたころでやはり自分の仕事か  
恩給の父に子供は一人切り  
紙屑へ紙屑へこ來る小正月

◇ 若井 たけし

晝の妓に戀の疲れを見出しぬ  
元旦の庭に生きんごぞおもふ  
マツセイもあり人間の恐ろしく  
逢はねば切れる戀のはかなき

愛猫「ふく」死す(三)  
猫が死んだ云へば君は笑ふだろ  
死屍の重たきこころも涙にて

◇ 植田 湖舟

金の力で食慾をすゝめて居  
餅だけの小包が來る施療院  
施療院焚火がほしいなと思ひ  
この上の無心にペンの動きかね  
少しよくなれば心に隙が出來  
過去の事想ひ出して微笑まむ

◇ 安西 杏三

急行をさけて夫婦の初詣り  
ボナスに妻あなごりの眼を向けて  
道化師の頬に宿りしお正月  
馬 妾 月 給 取 り 溝 鼠

◇ 中澤 濁水

延滞は待つとも素振りが氣に食はず  
ほかんとして叱られる看病人  
書付が來て牛乳を一つ減し  
理料實驗巧くゆかない譯も説き  
いつそさう定め度い娘やはり泣き

叱られる母をかばつて娘が滅入り  
薄給に馬鹿正直な欠伸が出  
歡びに來た赤ん坊は死んだこ

◇ 桑原 京郎

ほんちにしてが京ミ大阪  
しみたれな男に柳散りかゝり  
端つほであれぎ一流會社に  
脱ぎ捨てが重なり合ふて十二  
師走二十日を息子は戀にせはしうて  
何が私をかうさせたのか猪口を置き  
黙せば黙すこて女からんでき  
こゝは淨土よ枕のそばかす  
空想をたゝんで二階から降りる

◇ 島田 翠峯

はすかひに走るは女給のみならず  
色戀を離れて世話をするこ云ふ  
忙しさに逢ふたまゝなる袖だゝみ  
男手に育つた兄の短氣者  
お針子を取つて五人の子を育て  
輕口をいつそ氣にする無口者

毒仙氏の令閨を悼みて

添乳から起きて佛間に灯を入れる

◇ 上田 柳影

瓦斯タンク見てるるこ恐しい空想が  
尖端をゆくのよ足のたくましさ  
女の眼にさわぐ心も淋しくて

◇ 中見 光路

族の書に黴なきいらぬ子の心  
書こまいこすれき貧相な筆の先  
子の寢姿の圓味樂しむ  
家賃から浮いた二圓の遣ひごこ

◇ 池田 雪峰

年老いた母に出世を頼まれる  
藥だの温泉だのこ死んで行き  
見送りは土産の手前して呉れる  
政治家の父にはすまぬ繪をならひ

◇ 阿部 閑生

百貨店出て來る裳裾吹かれつゝ  
抜け穴の布團無慈悲に疊まれる  
ほかの事考へてるる返辭をし  
無造作に膝の兒胸をあけたがり  
霜燒のぬくもつてきたお針の娘

◇ 森 石 竹

死を求むる者の美しき影を拜めり  
見納めの鬼瓦さへ泣けてくる  
過ぎ去つた笑ひ自分のものさなる  
眞珠の海女の唄が流れて

◇ 西 村 市 公

妻のあるなし女給が聞いて何さする  
立志傳昭和に出来ぬ事をして  
親子か夫婦か自動車行き過ぐ  
お辭儀してそれで足らねば笑つこけ  
晝間見ますこ反物を借りてをき  
遊び疲れて繻帯もものかは  
ネルざはり母の乳房を思ふ頃

◇ 丸 山 公 二

芝焼の子供の肩を打つみぞれ  
おしなべて十二月さはなりにけり  
ほんまうに悪いか ふさん重たがり  
門衛は煙草貰つた義理があり

◇ 櫻 井 圓 角

宿の部屋影は悠くり通りすぎ

伊勢の七五三笑門ここを書いてつけ  
朝熊から見れば白山品がよく  
人間の慾は家鴨を陸で飼ひ

粒々集

○ 東京 富士野鞍馬

片側が世に出る今日の貰ひ物  
不見轉の妓丁をからず帯をしめ  
元旦の午前袴へ氣を配り  
桃花 紅潮半玉の腰の形  
商用で故郷を二へん通りすぎ  
幌をまくるこ舞妓が二人出る  
老俵夫にお寺詣りの得意だけ

○ 金澤 安川久流美

夜の街子の手袋にぬくままる  
貧しい家に小豆好きなる兒  
盗電の下握り箸の子さなり



柳 樽 評 釋 廿 四 篇 まで (十三)

麻 生 路 郎

(九) 四 篇 の 句 (續き)

一葉づつきしをはなれる柳ばし

柳橋は吉原ゆき、山谷通ひの猪牙を出した船宿のあつたころである。ちよきは猪牙舟の略稱で柳ばしから角田川をのほり山谷堀に著く吉原通ひの舟のこゝである。逢ひたさ見たさの標客たちはいづれも二挺槽三挺槽の早舟で急がせたものだ。

そのちよきが岸を放れるさまを技巧的に一葉づつきしをはなれるこゝ詠んだのである。大して巧い句だこは云へないが、さうした情緒が多少こもしのばれぬこゝはあるまい。

見申したやうだこ遣手呑んでさし

「こゝかで見申したやうだ」

こ遣手は既う盃をさしてゐる。斯うして練客のこゝろをしつかに攪むのである。財布の紐がそこからはざけはじめなのだ。

遣手は鴉母こも書く。俗にかいまはしのこゝで、昔吉原では花草こ呼んでゐたが語呂の悪いこゝろから轉じて香車こ呼んでゐた。香車は將棋の駒の一つでやりてこもいふたこゝろから更に轉じて遣手こいふやうになつたのである。遣手の前身は大抵遊女上りが多く、血も涙もない海千山千の老婆で遊女やの禿取締りをする憎まれ役である。

のむ所があるこ燈籠に見をいひ

吉原の燈籠は江戸時代の若い男の魂を奪ふ赤い灯青い灯だつた。燈籠の華やかさは仲之町を光りの海に化し、人の波がきよめき渦まいたのでも知れる。燈籠を觀てからの若人に忘れ得ぬなやみが續いたこゝは云ふまでもなからう。

この句は見物に行つた男が野暮臭く見られまい、遊んだこゝのないやうに思はれまいとする虚榮心を詠んだ穿ちの句である

享保十一年三月二十九日、角町中萬字屋の遊女玉菊が天折した翌々十三年七月その三回忌の追善供養に切り子燈籠を軒毎につるしたのが廓中燈籠を出した始のである。それ等の燈籠がひこしは懸客をよんだこは云ふまでもなかつた。燈籠は遂に吉原の年中行事の一つとなつてこの句を生んだ。

遣ひたてました下女へいこま乞ひ

離縁された女房が、いよく住みなれた家を去るにのぞんで朝夕追ひ廻してゐた下女にわかれをつける寂しい境地を詠んだ句。

「今迄は随分と遣ひ立てましたが、妾が居なくなつても、何かを氣をつけてお呉れよ」心からなる言葉をかけられては下女も貰ひ泣きさせられたこゝであらう。

四五年もお講に日立つ縁遠さ

四五年も引き續いて派手な姿をお講に見せてゐるので「さては良縁がないのだな」こその縁遠さを氣の毒がつた句である。

お講といふのは一向宗寺院で十一月二十二日から廿八日まで讀經と説法をする報恩講のこゝで、開祖親鸞上人の忌日によつて法會を営む所である。往時はこのお講詣りを利用して結婚の見合なきが行はれたので、随分着飾つた娘たちを見つけたのである。

此家で生れた内儀まけてゐず

家つきの娘は強い。それは今も昔も變らぬ。養子の聲が次第々々に小さくなつてゆく。

おそなへの次手に頼む三の糸

妾のお袋が「今日はお父さんの命日だから」おそなへを買ひに出やうとするに、妾はそんなことはごうでもいゝ云つたやうに「次手に三の糸を買つて来ておくれよ」といふ所か。

亡き夫を思ふ母の世界に、現在に生きる娘の世界とは斯うしたまゝころにも大變な隔たりがある。

なげなしの錢で松明一本買ひ

建久四年五月、富士の樹野の狩場で父の豐工藤祐經を討ち取つた會我兄弟を詠んだ句。

今宵こそ吾等が本望を遂ぐる時ださ兄十郎祐成さ弟五郎時致さが互に顔を見合はせた。ふりかざした二本の松明は貧しい彼等がなげなしの財布をはたいて買つたのだらうさはいささか穿ち過ぎた句。詠史川柳から藝術味を求めるときは無理かも知れないが斯うした句には詩としての匂ひが無い。

産所から一文やれど見世へいひ

巡禮者が門へ立つ。店では忙がしいのか、無關心なのか、誰も對手になる者が無い、いつも報捨して下さるお内儀の妾が一向に見えない。さてはお内儀はお留守かしらと思ひながらも巡禮はなほも聲張り上げて御詠歌をうたう。それはのんびりとした

一商家の風景である。

産物生活の無聊さは、巡禮の来たこゝに氣つかぬ筈はない。首だけを擡げるやうにして聽て店の方へ「一文やつてお呉れよ」「命するお内儀の美しい心の聲が響いた。

花の山ぬいたくはあらし也

酒癖の悪い侍が、暗嘩をふつかけたが最後、歡樂の花の山は忽ち修羅の谷に化してしまふ。抜いたくは女子供は逃げまじう。何れは落花狼籍たるありさまなるのを、抜いたくは嵐なりミ詠みこしたのである。花の山は櫻の咲いた山のこゝ別にさこゝ限つたわけではない。

掛り人むすこにけんをしなんする

掛り人の無聊さがにじみ出てゐる。それにまだ遊んだころの夢が全くさめきらないこゝが垣はれて面白い。

掛り人は居候のこゝ。拳は半若しくは指を屈伸して勝敗を争ふ遊戯で主に宴席で行ふものである。拳はもこ支那から傳來したもので、支那では酒を勧める法として行はれたものだ云はれてゐる。狐拳は我國で創作されたもので、鐵砲が日本へ傳來してから後に出来たものらしい。數拳の方が支那から傳はつたものである。

大くぜつ みす／＼雪に歸るなり

「そんなに奥さんのこゝが氣にかかるのだつたら早く歸つて

おあけなさいよ。ええごうせ妾なんかお多福ですもの、棄てられるにきまつてるのよ」

さか何んさか云つてゐるうちに、戸外では雪がちらちらして来た。

「オ、寒い」

さ云つて男は女によりかからうとした。

「あら、いけないわ」

女は身を引いてしまつた。

男はむつとした。そしてすつく立ち上つた。

「あなた怒つてるの？」

男は黙つて羽織をこつた。

女はもう泣いてゐる。

うつり氣なこゝこゝ針明一人こゝこゝ

あれを着たり、これを着たりされるのを見てのひり言か。針明は針妙の誤。良家に抱へられてゐる物縫女のこゝこである。良家の物縫女を針妙、遊廓のお針云ふて區別をしたさうである。

同じく四篇に

針明は返事の時についこゝこ

さいふのちあるが單なる寫生句である。句意は返事をする間に、ついこゝこいたさいふので時間を惜しむ辭のあるこゝこを云つ

たのである。

八瀬小原 きれいに牛をしかるこ

いくら京言葉がやさしくても牛をしかるのに「もつこ早うお歩るきやしたらごうごすえ」こも云はないだらうが、他國に比べては遙にきれいに叱るのであらう。

心中はほめてやるのが手向なり

やるせない思ひ——金——浮世の義理、そこから昔の戀愛至上主義者は一足飛びに地獄への道を辿つた。

それつばかしの金で死ななくともこいふが、生きてゐれば夫れつばかしの端た金さへ儘ならず逢瀬をさへぎられた二人であつたのだ。

この句はさうした二人の死に對してほめてやるのがせめてもの手向だ云つたのである。

貞享、元祿時代にはかなり心中をするものが多かつたので、享保年間、八代將軍吉宗の時代に、心中なきをするものをそのまゝにして置くのは社會風教上よろしくないといふので當時の奉行大岡越前守に命じて心中に關する法律を制定して一種の制裁を加え、心中さいふ名の美しいがために多くの心中者を出すさいふこが不都合だこあつて徳川の法制には相對死さいふ名を用ひた。

鳥籠のさうぢ糶屋ほごにする

愛禽家の家では部屋さいふ部屋が鳥籠で埋まつてゐる。鳥を飼ふてゐるさいふよりも鳥の家の中に住んでゐるさいふ方が適切である。

さうした家で鳥籠のさうぢをするこ、そこから中が鳥の糞だらけになつて、恰で糶屋のやうだ云つたのである。のんびりこした情景を出した寫生句である。

小間物屋 おめかこ帳につけて置き

お妾の横柄さこだらしなさに對する小さな反感こ侮蔑かさうさせたのであらう。

にけた跡 禿は對にしばらくれる

ある夜ひそかに、花魁こ情夫が廓を逃けてしまつた。金のかかつた花魁が逃げたこなるこ樓主は着くなつて大騒ぎをやる。

「お前たちが知らぬ筈はない。さあ花魁は何處へ逃げたか云へ」こ禿をさいなむ遣手の尖つた聲が響く。二人の禿は對に縛りあけられてゐるのである。

兩爲こ母はむすめのひざへよの

「あの人に添へば、そなたも一生結構に暮せるし、父も出世が出来やうさいふもの、これほご有難い良縁はないから、あの男のこはふつつき思ひ切つてたものい」

こ母が娘を掻きくづいてゐるさまを詠んだ句。斯くして小雀は政略結婚の生贄になつたのである。(つ)く





# 竹馬居雜筆

蛭子省 二

## (一) 光耀抄味誦

光耀抄（二月號）を評するのではなく、御婦人の作品から、私共男子の思ひつかね、恧せにし勝ちな事柄に、詩趣を誘致させて貰ふ、即ち光耀抄味誦は、私の一つの樂しみとして、毎回感謝の意を表する、筆を採つてきた。

右の手に大根洗ふ陽が當り  
 よいお鯛うまい蟹でこおいて行き  
 かざ雲が出て来たねんねこ着やう  
 緋の鹿の子の身重に袂あててゆき

武女子  
 欣女  
 葎乃  
 壽技女

それづくに微妙な特殊の鋭敏性がしみて居る、輕味の裡に內的省察もある、徒らに所謂傳統性川柳の穿ち的刺戟をしひ、成立させてるない、無論表現には、お互に交渉してみたい、痕もない事はない。

袂あてて緋の鹿の子の身重  
 丈けでは、作者の一箇の事實に適合しないのだろうか。「ゆく  
 『一言ひきらなくても、キラメキ丈けで實際感の印象が得られ  
 なかるうか。若し卑見で通用するせば、言葉からの情調に判  
 斷つければよい。

蠟燭の芯巻きまいても、陽が落ち  
 戸を閉めて炬燵を買ひに出る夫婦  
 武葎子

江戸ッ兒川柳にのみ蹋踏は許されぬ、川柳天地の廣大無邊に  
 遍滿充積して居る人間味の凡てを、自由に句にする憧憬的感激  
 の刻々の動搖に、川柳人の面目骨頭を活かさなければならぬ隨  
 意な表現にありのままの情趣が創造される、私共は餘りにも慣  
 習的な墮勢作にあって居る、葎乃女史の作に覺醒的な歸趣をみ  
 せつけられるではないか古い流行のみを追ふは、透徹した生活

者には堪え得られない苦痛のカセである。

朝のほこりの行衛をば 見定める

欣 女

私の朝の運動は書齋の掃除で、サイを採つて棚の塵を拂ふ、僅かな書物を整理に一度片付ける、古和本はいくらばたいても、きりがなくホコリが出る、疊ミ障子ミ日本服ミ机兼用の炬燵の暮し向きは 濛々たる塵埃裡の四六時なのである、天井のクモの巢をのぞかむとすれば、隙間から赤土が落ちてくる、これ程のホコリが一本の帚ではき出されるものでない、私が丹田に力をこめて庭へむけ掃く、空中に飛散する塵が朝光を浴びて渦をなすをみて、塵埃美を知るのである、ある理學者の話に、アノ日の出の赤、大空の蒼、悉く塵埃の作用する處、アノ細雨の凝結核心も亦塵埃であるにせよ、ホコリなくしては雨趣さへも味はふを得ないではないか。朝のホコリの行衛を見定めるは、ここに絶對的な自然美讃仰の精神もが宿つて居るので、塵埃逆待ではない。

袂くそつく報恩講の饅頭いただき

省 二

此句は報恩講の饅頭を有難がつたさいふよりは、モット深刻な老母の愛情の赤裸なる——私を子供のように思ふ——その袂糞に感謝するとも言へる、木綿の着物には尤も夥しく袂糞は出来る、そういふ簡素な生活に老いて甘むする、老母を尊く思はずには居れぬ。

掃除したホコリは、外來の風に舞戻つて書齋に再び落ちつく

毎朝三百六十五回繰返しては、私共の生活が完成してゆく、朝のホコリを見定める處の眼—其他の四官よりも—それ白らが色聲香味解法の六塵の基をなすにせよ、我がホコリあつて私の行衛を見定める事が、實に私共の川柳詩でもある、私は欣女史の一句を、單なる事相のみで、而して人生觀をもつきこめ度いのである。

## (二) 野火止と七小町

柳友、君より、三ツの質疑をうけた、その一ツは未番關係だと思ふから遠慮させて頂きたい。

火の中で夫をたすける歌をよみ

業平關係だと思ふ——『川柳六歌仙』 『川柳時代大觀』をみても此句は載つてゐないようだ——伊勢物語に

昔男ありけり、人の女をぬすみて、武藏野へるて行くほごに盗人なりければ、國の守にからめられにけり、女をば叢の中に隠し置きて逃げにけり、道ぐる人、この野は盗人のなりて、火つけんすすれば、女わびて

武藏野は今日はな焼きそわが草の つまもこもれり われもこもれり

こよむを聞きて、女をばこりて共に率ひていにけり

さあるのであらうと推知する、謡曲『小塩』には歌通りであるが、古今集は初句が『春日野は』とある、此の武藏野は三笠山麓の地名である。謠の木賊は『男鹿鳴く野の行方まで、妻や

こもりしそのはらの「ミ利用して居る。古句にもある。

つまもこちれりミ薄の中で泣き

色男あぶない日にも二度出合ひ

(古句)

此の一度から野火止傳説が附會されたのであらうと思ふ、廻國雜記に

此あたりには、野火止めの塚云ふ塚あり、今日にはな焼きぞこ詠せしによりて、烽火忽ちに焼けこまりけるこなん、それより此塚を野火止と名づけはべる由、國の人申しはべり

こある如く「此あたり」こは、武藏北足立郡大和田町大字野火止の事、江戸名所圖會に

昔は火田といひて、原野に火を放ち、草を焼きて肥し種を下すを、焼畑といひしなり、今秩父郡及び信州等に、焼刈蕎麥といふものあるは則ち是なり、秩父父郡及び信州等に、焼刈りては、人家に及ぼさん事の恐れあれば、堤又は塚なぎを築きて、其野火を遮り止むる料とする故に、野火止の名あるならん、今平林寺境内に、九十九塚業平塚なき稱するものあるも、同じたくひなるべし、かかる號を唱ふるは伊勢物語に因りて、後人のまうけたりしにやあらん

ミ、業平附屬の句では

(四五ヘン)

の逆水ミ、かはつて居る作であらう

野火は川柳には殆んごよまれてゐない様で私は餘りに知らぬ

俳句には焼野ミ題し

下駄はいて行くや焼野の薄月夜

しこのめに小雨降り出す焼野哉

等いくらもある、畔や野の草を焼いて、害虫の絶滅を計るので

三笠山を二月中日にやく光景は、人のよく知る處であらう、

きぎす鳴く春の焼野のかき蕨

外山をかけてもむわたるかな

の古歌もあり、俚諺に焼野の雉子夜の鶴こもいふ、

朝鮮には野火敷といつて、正月十五日に群をなして、野原に

ゆき、火を放ち一年の運氣を下する、内地にも今尚はやつて居

る地方があるかもしれぬ。

(其の二の間) 七小町ミは……舉げて下さい、

(答) 七小町は古來いろくの説があつて、私は未だ研究して

るない、

鳴風文學士の「川柳六歌仙」(五七頁)には、通小町、草子

洗小町、雨乞小町、高安小町、鸚鵡小町、關寺小町、卒塔婆小

町が舉げられて居る、

飯島花月さんは「やなぎ榊研究」誌第四十九號に、

身のほぎやつす七曾我 七小町

岡寺小町、卒塔婆小町、草子洗小町、通小町、鸚鵡小町、清水

小町、雨乞小町ミかいて居らるる、

雨乞小町の代りに山本小町をいれて居る人もあり、玉造小町

等をも採用して居るのは何であらうか、私は無論賛成出来ぬ。

黒石辰香先生の、小野小町論をみて頂きたい。参考のために記して置きたいのは、子規俳話中に、

◆第五題、「名月や湖水に浮ぶ七小町」の句の解釋を請ふ、

(答)この句は芭蕉の『月見賦』中にある句にて、琵琶湖に月を賞したる時の句なり、名月の夜湖水に七小町が浮んで居るさいふ理想句にて(中略)七小町は、詠曲に草紙洗、通小町、鸚鵡小町、卒都婆小町、關寺小町(尙他に二つあれど判然せず)をいふなるべし云々

(附記)七小町の内二小町を知らず云ひける、紫影江戸庵諸氏報じて曰く、清水小町、山本小町也。

今、武玉川をみるこ

七小町氣樂な時もなかりけり (三ベン)  
七小町四小町ほごは美しき (十ベン)

がある、「國語」國文學誌第六十六號に、西下經一氏の「傳説化された小野小町」がある、御一讀を願つて一節に、

詠曲に取扱はれた小町は、所謂七小町として卒都婆小町、關寺小町、鸚鵡小町、通小町、草子洗小町の外に雨乞小町、玉造小町、がある筈であり其他高安小町があり、本居内遠はこ

の外に清水小町、山本小町(私曰山木)、夢見小町、雲林院小町、市原小町、富士見小町の名を掲げてゐる(全集六五三頁)、この内卒都婆、關寺、鸚鵡の三つは玉造小町を準據してゐるこが明かであり、極端に落魄した小町を稍々現實的にし、内面的に寂しい老後の小町を描き、然も三曲は連續

した一つの展開をもつてゐる、通小町は卒都婆小町から派生してゐるが如くであるが、一面には小町物語を形成してゐる以上諸氏の説を總合して、その源を考へれば、凡そ何れが正當に近いかはわかる。

### (三) 藤本兄弟社禮讚

川柳の社會進出と言ふ聲は、大小柳誌の發行される土地からは、カナリ叫ばれる、進出策にも色々あるであらうが、マツ雜誌部数を澤山出すことは其の一ツであるは云ふをまたない、全體各一流雜誌は月々何部社會にバラまいて居るのであらう、田舎住ひの私には更に見當がつかぬ、たまには川柳的皮肉に『文藝春秋』一誌の如く部数を印刷するものが、あつてもよからうと思ふ。

それは借をき、本誌も専ら川柳家外に川柳を宣傳すべく努力して居らるゝ事は察するに餘りあり、且つ其點にも賛意を表して非才を顧みず、執筆を續け居るのでもあるが、私は古狂木の摺木の施主は花屋の久次郎  
櫻木の花屋へ柳樽をつゐ

なごをみるまきに、餘りにも多からざる、そして組版にかなり骨の折れる、柳誌を引受けて居る印刷所主の、柳壇への貢獻を更に句化せて感謝の意を表しないのは、川柳家の思ひやりが未だ少いのではないかと考へる。私は爰に本誌の印刷所藤本兄弟社主にして、賛助員たる藤本卯之助先生に滿腔の敬意を、紙上

で捧げ度い、社主は麻生氏と特別の間柄であるから、そんな表面立つた言辭は悦ばれないかもしれぬが、川柳家から申出づる事は、快心の笑をもて享入れらるるであらうと信ずる。

本誌が柳壇に印した功績の一つに、発行日の正確といふ事がある、本誌の出現までは、一流柳誌なるものが、年に四回位発行して、大手を振つてゐたものであり、今日でも一日発行を認可を得て、月半に送りこすものもあるが、本誌に刺戟され、近時は競争的に正確になりつつあるは、喜ばしい現象である。實に本誌は今日まで一回して発行日を違へた事のないのみか、一日より数日早めに讀者に送られて居る。

数日早いといふは、全く編輯者三印刷所との協力上の親切であつて、北海道から滿鮮の讀者が、月の一日に手にし得るにはそれだけの餘裕日數があるのである、換言すれば、日本中の愛讀者へ發行日通りの心待ちにそむかぬ、約束を嚴守して居らるる奮闘は、月々のことであるから、涙ぐましいものである。

舊版『天津』誌四號がついて、中沼氏の文中に『川柳雜誌社の川柳社會化も久しいものであるが、川柳家以外の原稿を吸収し得ないのは、路郎氏の熱心が足りないこと云ふよりも、ルビ附活字の低級視される祟りではあるまいか』と、あるのを讀むで私には諒解がしにくい。

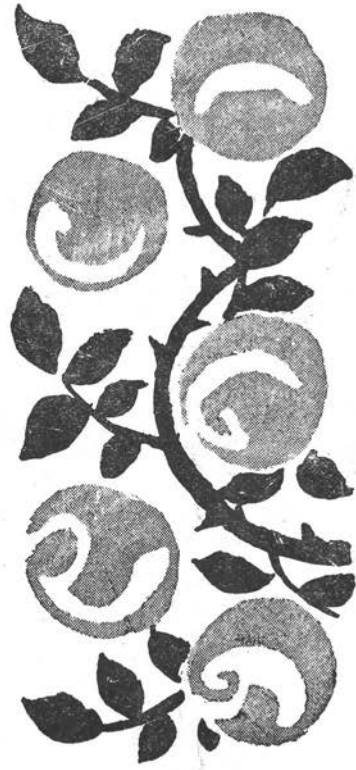
(一) 川柳家以外の原稿で、川柳の社會化をしよう云ふが如きは、第二義である。川柳家に因つて川柳進出するのが、希望

的な努力及目的なのではないか。卑俗な言葉を用ふれば、人の禪で角力はマツ取りたくない。専ら川柳家の執筆のみを尊重して良い、又そこに實力がなくてはならない、私は柳誌上川柳家以外の人々から、金儲けの俗談を教へられ、女給女優の内幕の智識を授けられる必要求をもたぬ、そういうふ事は尤も安い、文藝春秋誌に譲つて置いた方が、随分實利實益である。

(二) ルビ附活字問題は、印刷所主に係る事件となる、藤本兄弟社は輪轉機を出る、ルビ附活字を尤も多く使用する點に特色があるので、ルビ附を申しむは新聞雜誌の上ではないのである。現に東京朝日新聞の文藝欄は、尤も權威あるものであるが、ルビ付である、ルビ付の爲めに低級視せられ、寄稿者が私の如き低級者で常にふさけて居るに至つては、私は面目を失ひ愛讀者へも申譯なくなる、いつそ遠慮して地方の小柳誌のルビ付でない方へのみ、立廻る事も決して不可能ではなくなる、が私はルビの有無をさういふ事に結びつけ度くはない、此點だけは中沼氏の御再考を願ひたい、さうでない。藤本印刷所主へ、川柳家として私は氣兼ねでならぬ。

曾て、私は大阪で藤本先生に初対面する好機があつたのであるが、宿の女中さんの思ひ違ひで電話が通ぜず、果たさなかつたのは常に遺憾に思つて居る、本誌の關係諸氏により、藤本兄弟社禮讃の會が催されるならば、私の素志が達せらるゝ譯である、花屋久次郎の如く句にもして残して頂こう。(二月十日)

# BUILDING



## ゴークを懐しむ

岩 本 素 人

社からの歸途、さある文具店のウ井ンの前に空腹の私の足が立ち止つた。その壁面にゴークの『日まわり』の複製が掛けられてあつたからである。寫眞復色版刷の獨逸ものらしい。色ミ言ひ調子ミいひあの力強いタッチまでが原畫を彷彿たらしめる出来ばへである。

私はゴークが好きである。畫は勿論で

あるが殊に彼れの性格がたまらなく好きである。

いつも彼の畫に接する毎に事新しく思ふ事であるが、ゴークのものは見て居て畫ミいふ感じがしれない。畫ではなくてゴーク其人にぢかに顔ミ顔を突き合はして居る感じだ。そして彼れの吐く息吸ふ息が私の全身に感應する。グン／＼迫つて来る。ミへらい壓力を感じる。をそろしい力だ。

そこに描かれてあるのは『日まわり』ではなくて彼の心臓の辯、畫布に盛り上げられたのは畫の具ではない。ゴークの肉がなま／＼積まれてある。そしてあの力強いタッチは彼の動脈であらう。實にゴークの畫は眞に呼吸してゐる。焔の如き熱もて畫布の上に彼れ自らを焼付けたのである。

ゴークの製作は畫を描くのではなくて滿身に力を込めて畫布に頭突きを持つて行くのである。其製作態度に一分の隙もなかつたであらう事は彼のスケッチ判位の畫からも充分に窺ふ事が出来る、何ミ言ふ素晴しいゴークである事よ。

良いさかうまいさか言ふ言葉はゴークには當て箱まらない。素晴しい。そうだと全く素晴しい。

今時ゴークの事なんが言つてるミ、ミこかで古い／＼さか何ミか嘲笑つてゐる聲が聞へぬではないが、良いものは何年

經つても良い。私は斯うして何時までも折りに觸れては偉大なる諸聖ゴーズグの思ふ事によつて私の内に新しい生命の泉の湧く事を生き甲斐ある事の一つとして抱き締めて行かう。

川柳家にもゴーズグの様な力強い作家が今に生れて来るであらうやうに私には豫感される。さうか正夢である事を祈る。二階を降りて何處へゆく身ぞ 路 郎

私ははしなくもこの句を思ひ出した。

(一九三〇・二・一七)

## 婦人の脚

伊藤神山人

昔は日本婦人の美は髪かたち云ふて上の方にあつた様だ。今の米國婦人の美は下の方の足にある。スカーツはもうこれ以上に短くする事はしても出来ないまでに切り詰めて仕舞つたので一寸腰を屈めても電中の乗り降りにも男ははらくさせられる。これを以て米國婦人の美が低

下したなんぞ惡口はめつたに言へない日本の經濟、米國婦人の脚の爲に左右されて居る。此等婦人の着用する絹の靴下の生産高は一ヶ年實に六千三百二十七萬ダースの巨額に上つて居るさうだ。自動車

のアクシデントの何割かは婦人の服装の突飛な流行にある云ふた人がある今年の流行は「スカーツ」が大分長くなつた。膝一分下二三寸位が通常服で、正式の場合には四寸位後の方を長くしてアンダープンが多いようだ正式であればある程長い見えてイヴニングドレスの裾は床にたれて居ります。(桑港より)

## 燐寸と川柳

安川久流美

炭火に點けるよりも燐寸を摺つて巻賣をくべる事が快よいのはさうした事です。川柳人のくせか知ら。

家庭燐寸こいふものがある。

宣傳燐寸こいふものがある。特用燐寸こいふものがある。大きいマツチよりも細いマツチを好きな私川柳人のくせか知ら。

軸が黒くて硫黄の赤いマツチ。

軸が赤くて硫黄の黄色いマツチ。

軸が白くて硫黄の黒いマツチ。

私はその三が好きです、川柳人は平凡を好むのが眞實でせうか知ら。

軸の黒い燐寸には齒の白く、原始人を連想する。マツチを摺る時句を考へるのが川柳人のくせか知ら。(二月二日)

## 父

大西八歩

道頓堀を千日へ抜けようぞ、父。私は遊廓の筋を南へ歩いて行きました。道頓堀のにぎやかさは違つた、又別ななまめかしいさんざめきの内を、兩人は無言



のまゝ足を運ばせてゐるに、場所柄曳子の目は私の若さを見のがしませんでした「チヨイミあんたはん、チヨイトくく」身をかはずひまもなく、私のトンビの片端は其の年増女の手の中に、完全につかまれてゐました。こうした場面は今年二十四才の私にまつて、別にたいした問題でもなく、或ひは心の内のまごこかでは、こういふ光景のあらう事も豫め描いてゐたかも知れませんが、わざと「オ、恐はー」ミ、少し仰山な身振をして曳子の手からのがれました。する私の父は、突然眞面目そのもの様な顔で、太いそして強い聲で「ナニ恐はいこはなひい！」ミ自分の息子——つまり私をかばふ様にして、尙も私につきまをふにしてゐる曳子の前に立ちふさがりましたそして私は完全に父へ取り戻されました。

私は初の内は、餘り馬鹿らしくて、おかしな内にも腹立たしい様な氣持ちに

らはれましたが、時間が経つて行くにつれて、何か知らぬやうなけんしゆくな氣分に打たれてくるのを感じずにはゐられませんでした。偉大なる愛——親子間のみに生れるこの凡てを超越した愛情に氣付いた時、もう今先まで父にある反感を抱いてゐる私は、この子供視される屈辱を、心から喜んで受け容れたい私自身に返つてゐました。

ふき氣がつくと、いつの間にか兩人は電車道へ出てゐました。父の後へついて歩いて行く内、私は目がしらが熱くなつてくるのを覺えました。

## 運命

(五・一〇記)

### 魚住三平子

生れながらにして教養もあり、財産もあるところの富豪の家に生れた子、生ながらにして赤貧洗ふが如き貧しい裏長屋の夫婦の間に生れた子、さうして兩者

はもう生涯全く異なつた生活を生活すべく、決定されてゐるのである。此を運命云ふのであらうか、若し此が運命云へたら、運命は何んぞ冷やかなものではないか、そして地球上の全人類は此兩者のいづれかに屬して其冷やかな運命をたざりつゝあるのである。宿命云へば云へる、嘘偽云へば云へる。宿命の中には静かな反目があり、嘘偽には暴風の如き鬭争がある。

### 縁雨ミ號を改めました

#### 二柳子改橋本縁雨

大阪市住吉區杭全町六〇三  
川柳雜誌社事務所

### 隨筆雜誌 一月刊

#### 清談 菊版廿四頁 定價拾錢

友人横川三果編輯の氣のきいたものです。御購讀下さる方は私迄おしらせ下さい。(安井ひろし)





# 人間・馬・魚

— 川柳的小話七つ —

川上三太郎

## 和漢洋贅澤話

人間の一生に一度位贅澤時代があつてもよい。

「一體井戸の水なんてエものは何の位砂糖を入れたらあまくなるものかしらんなあ」

さう思つてこれを實行した人に名古屋の長者永樂屋藤四郎がある。

支那に張さいふ金持があつた。打續けた放蕩に愈々家貧分散いふ事になつたが、それでも彼の手に二千兩残つた。然し彼はその二千兩を悉く金箔に替へて附近の五重塔へ上つた。さうして折柄吹き来る荒寥たる冬の風に、彼は塔の頂上から右の金箔を掌の平へ乗せ舞々として吹き飛ばし、無一文になつて行方知れずになつた。

佛蘭西ルイ王朝時代には、如何に贅澤すべきか——さいふ事

が、恰度日本で何うしたら此の不景氣がなほるかさいふのと同じ重大問題だつた。するこ或る時ローレンス侯が陛下の御前に同侯した。そして申上げた。

「陛下、私は昨夜近頃でない贅澤を致しました」

贅澤といへば眼のない陛下、殊に謹厳そのものゝやうな侯が贅澤をしたさいふのだ。思はず身體を乗り出して

「うん、してそれは何んな事だ」

此の時老侯は鉛の兵隊のやうに直立して答へた。

「陛下、私は昨夜闇の中で、二時間も眼をあいて居りました」

### 地に求むるもの

年の暮である。若い救世軍の士官が五六人聲を振絞つて居る。するこそその周圍を大勢の彌次馬が、別にそれを聞くでらなし、されば三言つて聞かぬでもない頗る曖昧模糊たる態度で立つて居る。

突然「うーいふ泣聲がした。するこそ此の彌次馬、ゾロ／＼と忽ちその聲のする方へ行つてしまつた。見ればそれは迷ひ子である。彼は頗る勇敢な聲で號泣して居る。彌次馬の中には

「おい、何うしたんだい」

三言つて子供の脊を撫で、やつて居る者もあつた。當然救世軍の方はガラ空きになつてしまつた。

かの若き士官たちは大いに驚いた。さうして

「みなさん、私共の求むるものはあの天國の父であります」

三叫んだ。けれども彌次馬は振り向いても見なかつた。

然し振り向いても見なかつたのは餘りに亦當然の事である。即ちそれは如何にかの若き士官たちが夜もすがら遠き天國の父を求むるべく聲を張り上げて、そのお隣の迷ひ子がたゞ一人、近き地上に母を求むるその強き聲には敵はない。

### ダシガラを追ふ

明治時代の興行界の傑物千葉勝がコツ／＼金を貯めてゐるのを、何うかして遊びの味を覺へさせ金の有難味を知らせてやうとしたのは故田村成義だつた。

で或る時田村は彼に金を投げた。

「君のやうにそんなに貯めて許り居て何うする氣だね。死んで持つて行かれる譯ぢやなしさ」

だが千葉勝はケロリとして答へた。

「何うする？貯つた金はお茶の出し殺し同じでさあ。茶殺は臺所の人間が何さか始末をつけませうよ」

要するに千葉勝は金をこしらへる事に愉快を感じたので、そ

の愉悅を感じたあとの貯つた金に就いては少しも興味がなかつたのである。だからその貯つた金は、彼に取つては散々飲んだお茶敵なのだ。

然し昭和五年、如何に此のダンガラを追ふ者の多きことよ。これを無我夢中になつて追ふ者を奮闘の人と名づけ、これに追ひつた話を成功立志傳といふ。

### 或る金庫業者の話

いゝえ、金庫は一生道具ちやありません。むしろ一年ごつきりのものですよ。何故ぞ仰言るんですか。

金庫つてものは座敷へ備へつけるに急に物ごが心配になつて来ます。ですから何でも無暗にその中へ押込んでしまふのです。そこで忽ちいづばいになつてしまひます。するに今度は去年より一廻り大きいのご取換へたくなります。さらいねんは更にまた一廻り大きいの一つまり斯ういふ具合に金庫はだんだんに大きくなつて行くものです。恰度子供のおもちや箱は幾ら大きくしても始終いづばいで溢れて居るやうに——。

金庫の大きい家はご心配も大きいんです。おもちや箱の大き

な子ほご神經質なやうにですな。

金庫はつまり人世のおもちや箱なんですから——。

### ビカくとポロく

紫野大徳寺一休の名が一世を壓した時、或る實業家——それは現今なら自分の庭へ自分の銅像を樹て、自分で除幕式の綱を引張るやうな實業家である。その丸持長者が一休の名聲に憧憬れて一夕彼を招致した。

當夜件の金持は邸内を美々しく、一休の來るのを今や運し待ち構へて居た。然し何時まで経つても彼の法衣燦然たる姿が見へない。ただ一人の小坊主がチヨコくミ来て、大きな立關へボンミ風呂敷包を投げ出して行つたきりである。

金持が怪しんでその包を開くに、中から眼もまばゆい金襴の袈裟が現はれた。彼はニヤニヤして悦んだ。

「禪師は矢張り來るな。これはその前胸れぢや。幾ら一休でも俺の力には……」

袈裟の間から手紙がぱたりと落ちた。

「お招きに依り貴意に沿ふべくピカ／＼した袈裟だけ參上—」

蘭蘭西博物學の泰斗ミシエル、アダンソン博士が、學士院の會員に推された時、折角だが御招待に應じる譯にはいかないと斷つた。その手紙に曰く

「小生耀ける靴を所持致さず 候に付—」

ピカ／＼とボロ／＼だが、時に同じ意味の場合がある。

## 親子井ニツ

「おい、お前また帝劇へかけるのかい」

「え、なぜだつて此の帯と羽織までは今月の帝劇は初めてよ」

「うまいなあ、矢張り尾崎紅葉は—」

「誰？その人。活動の辯士？」

東京の郊外に同棲して居る若い男女の間に斯んな會話はザラである。恰度その勝手口の外に、蕎麥屋の親子井がニツ、キラ／＼朝の十時過ぎの陽を浴びて、病院のスリツバの如く投げ出されてあるやうに—。

## 光長翁の疝癩玉

震災で死んだ金彫界に於ける名人豊川光長翁は、有名な話好きであつた。だから何んなお客でも必ず一銚子添へて出すのが家例であつた。

或る時また若い美術學校の金彫科の學生が、學校の用で翁を訪問した。話好きの翁は相變らず悦んで仕事なんぞはそつちのけにして學生を相手にしやべり始めた。やがてその若い話襟のお客様の前へ高足のお膳が出た。一本ついて居た事は勿論である。

然しその話襟君話もせず箸も取らず、無論猪口には指をも觸れず不景氣な顔で眼ばかりばら／＼。一昨日の食麵麩のやうに固くなつて居るばかりだつた。到々翁の疝癩玉が破裂をした。

「君、魚なら飲みたまへ、馬なら食ひたまへ、人間ならしやべりたまへ」

本當だ。人間は何にでもよい。然し何かに屬して居なければ不可ない。妙くも何かにはつきりして居なければ—。



# 一路集

(集募句)

## 同僚

同僚を少しはわかる電話口 柳翠  
 この苦勞知らぬ同僚貸せま言ひ 仁之助  
 溜るだけ溜めて同僚辭めて行き さだを  
 子の友が隣の椅子へ就任し 勝二  
 同僚へ信用もあり借りもあり 市公  
 同僚の飲む相談はメモで来る 黒天子  
 同僚は國訛りまで持ち出され 太路  
 三角だまは同僚も知らぬなり 空ツ風  
 同僚と戀をはかりにかけて見る 湖舟  
 同僚と同じ女給を思ふてゐる 不然  
 會計に据つていやなやつにされ 沐天  
 同僚の酔へば嬉しいことを言ひ 今雨  
 同僚の名をなつかしく見せらる 花夢  
 同僚へ花婿様と呼んで酌ぎ 公二  
 新調の服に同僚目をつける 圓角  
 同僚のもう借りの事なき忘れ

## 前田雀郎選

同僚をまたして茶漬喰つてゐる 青柿  
 同僚の家に泊つた朝戻り 晴風  
 女房が居て同僚は面喰ひ 四方路  
 同僚の情婦へ少し言ひすぎり 芦穂  
 同僚がよつて見合ひの手筈きめ 節花  
 同僚も頼みにならぬ大三十日 菊路  
 いい妹持つて同僚氣が疲れ 折草  
 同僚は勝手元からさけて行き 蚊郎  
 同僚の兒のない丈の氣樂にて 鐵洲  
 新婚の妻へ同僚改まり 虫二  
 同僚さして香典へつきあへり 同

五 客

同僚をまだ忘れない酒の酔 一羽  
 その日ぐらしへ同僚の太い聲 三子平  
 金の事言へば同僚あつけない 英賀夫  
 工合が悪いと同僚らしくなり 救命



## 杭全町 MEMO 雨緑

- ▼年頭に際して 本社事務所宛に多数の年賀状を頂き厚く御禮申し上げます。
- ▼客員伊藤彦造畫伯が 本社新春句會へ色紙二葉を寄贈されました。厚く御禮申し上げます。
- ▼同人水谷結美氏は、二月三日華燭の典を舉げられるさうです、お喜び申し上げます。
- ▼社友和田源坊氏は、新年早々横濱から東京方面へ旅行されて「西郷の前にあやかりたい心」の句を寄せられました。
- ▼社友松田多郎、生田翠夢、櫻井圓角の三氏は一月三日伊勢神宮へ参拜されました。
- ▼社友若井たけし氏は、一月十七日伊勢参宮に行かれ「一月の陽射しにそむき白浪や」の句を寄せられました。
- ▼社友永田里十九氏は、舊冬から大阪市南區壘屋町周防町東入南側で、カナメ喫茶店を開店されました。川柳家諸氏のお立寄をおすめ致します。

同僚は參圓多い顔をして 草石  
(人)同僚は邪魔な女房を持つ 狂雨

### 角 帯

角帯でズボンも高く旅に出る 比呂志  
行つてさんじます貝の口を見 大絃堂  
角帯が火鉢圍んでるばかり 鶴 峯  
角帯はず算盤を出してくる さだを  
角帯が丁稚を卷いた様にする 純 雄  
角帯を父は一つぺんして見せる 三子平  
角帯の日から自轉車役に立ち 凡句郎  
角帯でいつもの顔で寫つてる 圓 角  
角帯に襟をかけた忙しき 光 路  
ステテコへ立った角帯ごつこ下け 同  
角帯の少しゆるんで書になり 英賀夫  
たまにする角帯の手の長短 鐵 洲  
角帯をほつきり見せた呂の羽織 寒 風  
角帯の一三組辯士へ手をたたき 亂調子  
大阪の伯父角帯をほめてくれ 一 柳

○ 駒 人 選  
一錢の音をさせてる小商ひ 湖 山  
炬燵から錢を受取る小商ひ 文 芳  
恩給もあつて小店は菊も置き 大夢子  
失敗をした事も云ふ小商ひ 三子平

(地)同僚の榮轉ばかり祝つてる 大絃堂  
(天)同僚の親孝行が親に知れ 四五磨

### 高 橋 か ほ る 選

角帯のこもかく店を出る 休み 四方路  
樟腦へ角帯深くしまはれる 敏 郎  
角帯のまじめさ見せる髪を分け 桂 枝  
角帯へ片手を入れてしんみりし 冷々子  
角帯のいたみが目立つ十二月 芦 穂  
マネキンへ角帯同志意見あり 柳 兒  
商人になつた氣持ちの帯をしめ 青 水  
角帯が退院の世話やいてくれ 節 花  
角帯が御きけんさん云ふてくれ 鯉 友  
角帯を結んでくれた口入屋 大 黄  
(人)角帯が来るま景氣を尋ねる 花 夢  
(地)角帯をしめ直して客の前 里十九  
(天)夕方の街を角帯あちこちし 籬 風  
(軸)白木綿賣る角帯は手をたたき かほる

### 酒 井 駒 人 共 選

店の間で髪を梳いてる小商ひ 公 二  
小商ひ資本の切れる雨になり 立々子  
老夫婦小店に別にためてる 八 步  
風船屋面白そうに空を見る 花 夢  
小商ひ化粧品から置き初め 桂 枝

▼同人松盛學人氏は 伯母様の危篤で一月六日横濱へ趣かれ、十日間の介抱も其効なく伯母様は逝かれました、哀悼を申し上げます。

▼社友西村市公氏は 神戸支部の幹事を楊井二南氏と交替されました。

▼高見柳骨氏は 本誌の一卷時代から同人として活躍されてゐたが、今回家事の都合で退社されることになりました。再び復活されんことを期待してゐます。

▼同人矢田冷刀氏は 本誌の二巻當時から社のため力を盡してゐられましたが、昨年未から病におかされ仁川病院に入院中、不幸にして一月十六日午前一時永眠されました。仁川の本願寺に於て葬儀を営まれたさうです、謹んで哀悼を表します。

▼本社京阪社の同人社友の懇談會を 一月十五日夜清水町端の坊で催しました。

▲川柳に手を染めてから 満七周年を一期として、従來の二柳子の雅號を今後縁雨と改號を致します。

▼本誌の編輯は路郎先生、ひろし、亂耽、愚陀杏三、公二、柳影の諸氏と私とで致しました

### 移 轉

▼食満南北氏は 大阪市西成區南海通二二へ  
▼越田久水氏は 高岡市源仲町へ

小商ひ巡查時々遊びに來  
 小商ひ小僧が置けたしまりやう  
 小商ひ店番何か縫うてゐる  
 積めるだけ積む八百屋朝を出る  
 小商ひ破産もせずに續けて居  
 沿道は其日限りの小商ひ  
 あきらめて賣つて居る小商店  
 醫居して峠へ茶屋を出してゐる  
 北風をまごにも受けて小商ひ  
 小商ひよほぎ氣長な生れなり  
 忙はしきもいつそ嬉しい小商ひ  
 小商ひ素性も聞いて買うてゐる  
 小商ひ鹽ふりかけて朝を出る  
 小商ひ明日の日和を見て仕舞ひ  
 小商人山茶花賣めて通り過ぎ  
 小商ひ昨日と同じ荷で出掛け  
 小商ひ餘生を伯母は貯めて居る  
 人手をば借らず貯めてゐる小商ひ  
 親類へ一品賣れた小商ひ  
 或る時は店も休んで小商ひ  
 日曜を女房に賣値教へられ  
 朝からの客を數へる小商ひ  
 小商ひ仕入れただけ賣て來る  
 小商ひ儲けたらしい荷の輕さ  
 賣れる品教つて居る小商ひ  
 子こて無くまたためる氣小商ひ  
 小商ひ丁稚一人を頼まれる  
 小商ひ日燵の品を負けてくれ

沐天 四方路 青穂 英賀夫 青水 一舟 須山 清路 山茶花 仙人掌 四五磨 市公 光路 キヨシ 今雨 雪彦 敏郎 大黃 折草 鐵洲 太路 凡句郎 幻草 柳兒 風來坊 山月

小商ひ植札を太く書き替へる  
 小商ひ米代だけへ暮れかゝり  
 小商ひ切れてる品を又聞かれ  
 内職のほかに儲ける小商ひ  
 女房の慾でしてゐる小商ひ  
 大通り昔のまゝで小商ひ  
 落ぶれてこの小商ひのします  
 (人)品切へ寝轉をまゝの小商ひ  
 (地)竹馬へ炬燵を出て何か賣り  
 (天)遠足が來て賣り切き小商ひ

○舟々  
 ほつゝに知つて呉れ小商ひ  
 あきらめてこまかく賣つて夫婦  
 小商人入り日にちつこ立つて  
 一錢の客に立つたり座つたり  
 學校の活動あてのアセチリン  
 小商人山茶花賣めて通り過ぎ  
 小商ひながらも古い家號なり  
 小商ひ切れてる品を又聞かれ  
 小商ひひなまで娘押して來る  
 小商ひワナメーカーを前に置き  
 小商ひ店へ子供が來て遊び  
 小商ひ休みの亭主腹が立ち  
 縫物の方が忙しい小商ひ  
 小商ひ二階かしますも貼り  
 出來過ぎた子は勤めてる小商ひ  
 小商ひ隣へ恐れ入る電話  
 無い品は賣切にする小商ひ

同 耕民 市公 嘉月 青穂 冷々子 綠之助 柳兒 空ツ風 今雨 紫電 勝二 野渡 たまき 草石 キヨシ 市公 三子平 太郎坊 野人 山茶花 冷々子 菊路 光路 四方路 柳兒

▼杉岡幸泉氏は 大阪府泉南郡南近義村窪田 二六七へ  
 ▼西本三笑氏は 浪速區志美須町三丁目七三 にて吉川食堂を開店

一月號訂正

騾で足袋はく日歸りへ、犬もくる 省二 朝ッから支那唄うたひ大根まける 同  
 前號六九頁最後の行子等の目はたゞはてしなきパラダイスとあるは「子等の目」の誤り。若井たけし氏の句

新誌友

(五年 月十七日まで)

「川柳雜誌」前金牛年分壹圓八拾錢以上拂込みの讀者を誌友として、こゝに芳名を掲載します。何卒此際新讀者を御勧誘下される様お願い申します。御紹介下される方には「川柳雜誌」の近刊を見本として差上りますから御申込下さい。(線雨)  
 鷺田南耕、瀨瀬三郎、大島重太郎、松並光哉、澤井朱唇子、青龜泰三、鈴木九葉、渡邊芳之助、副島半柏子、一井孟十、畑田炭車、石墨易二、篠原憲太、松崎喜樂、須山龜一、長景雄、荒井、杉岡幸泉、枝村秀嶺、須本鶴之助(麻生路郎)、新谷庄吉、清原徹一(長崎柳秀、岩出無鐵砲、(安井ひろ)和田龍一(中見光路)中須半介(住田亂蹴)阿波泊水(橋本線雨)括弧内は紹介者

小商ひ賣上げみんな儲けた氣  
 店の間で髪を梳てる小商ひ  
 小商ひ背負へるだけは背負<sup>て</sup>來  
 遠足が來て賣り切れる小商ひ  
 小商ひ問屋へ願ふ事ばかり  
 小商ひ亭主夜だけ顔を見せ  
 北風をまごもに受ける小商ひ  
 又品を買はさるる小商ひ  
 小商ひ今日も時雨れて戻つて來  
 解禁をよそごみに見る小商ひ  
 小商ひ儲けたらしい荷の輕さ  
 學校が戻つてからの小商ひ  
 小商ひ病む母親が待つてゐる  
 御得意の家を教へる小商ひ  
 その姿體裁だけの店を出し  
 小商ひ老舗を探す程に貯め  
 小間物屋出す約束で落籍される  
 編針の片までバツト出して呉れ  
 小商ひ五圓札なら替へま<sup>つ</sup>さ  
 下け髪が陰から出て來る小商ひ  
 賣上が小使になる小商ひ  
 朝からの客を數へる小商ひ  
 小商ひ位は出來る涙金  
 小商ひ元手の切れる雨になり  
 親類へ一品賣れた小商ひ  
 小商ひお釣がなくて賣りそびれ  
 出し店に風を行衛を見るばかり  
 人手をば借りか貯めてる小商ひ

虫二  
 公二  
 青柿  
 今雨  
 玄絃堂  
 清芳  
 文路  
 一羽  
 芦穂  
 四五助  
 幻草  
 嘉月  
 狂雨  
 仙人掌  
 八歩  
 晴風  
 空つ風  
 大夢子  
 同  
 太路  
 同  
 立々子  
 同  
 大黃  
 柳兒  
 玄絃堂  
 敏郎

小商ひ子供の智慧が進みすぎ  
 日曜日妻に賣値を教へられ  
 隠居して峠へ茶屋を出してゐる  
 小商ひ二三度行けば覺へられ  
 小商ひ仕入だけを賣つて來る  
 氣の毒な程に小店の釣をこり  
 木枯を引込んでゐる小商ひ  
 新妻の恥かしく出る小商ひ  
 借金が出来ないだけの小商ひ  
 小商ひ亭主の番は飲んでゐる  
 小商ひ化粧品から置き初め  
 悲觀した様は一錢負けてくれ  
 さゝやかな店さは云へご<sup>ま</sup>餘生  
 小商ひ<sup>ご</sup>立派なショウインド  
 あんな店でも子供を育て  
 小商ひするに都合の家見つけ  
 小商ひ<sup>う</sup>らやまし<sup>さ</sup>に見て通り

圓角  
 鐵洲  
 須山  
 一水  
 凡句郎  
 山月  
 青兒  
 美<sup>さ</sup>う  
 菊路  
 沐天  
 桂枝  
 綠之助  
 同  
 英郎  
 同  
 青兒  
 同  
 尋蜂  
 麓生  
 一柳  
 冷々子  
 蚊郎  
 山茶花  
 折草  
 文芳  
 青柿  
 花夢  
 南生

力 十 メ 喫 茶 店

心ブラにお出での節

は是非お立寄を

緊縮時代に最も適合

した

カナメ喫茶店へ

柳人は特に歓迎いた

します。

南區營屋町周防町

東入南側

カナメ喫茶店

柳人

永田里十九經營





# 川柳博士出でず

安川久流美

川柳は何處へ到達するか——私はいま  
斯く叫びたいのである。之を大体に區分  
すれば現在三様の歩み方があると思ふ。

その一は娯樂体趣味の句、その二は未  
來派的先進の詩形もしくは奇形の句。そ  
の三は生活を基調とする、人事を主とし  
四季の自然を加味したる句の差別である  
この三流の中に孰れが川柳と稱するもの  
か？之が疑問に疑問を生んで初心者及川  
柳にたづさはらんとする人々を迷しめつ  
ゝある。

私一個人の考へましては前條中第三の  
主義を歩みつゝある。

無論古川柳なるものは問題にしてゐな  
い。單に考證して之を扱ふだけなので  
ある。

◇ 出は出たが一人は松の内 路郎

古來「松の内」の句に佳句を發見した  
こゝがない。往年私が某新聞社に勤めて  
ゐる時、新年川柳に

松の内他人の家に起される 紅の花  
を面白く思つて壓巻にしたが、本誌新  
年號で路郎氏の前句を發見し、より以上  
にするに躊躇せな。平凡にして見通さ  
れぬ想、又表現に於て尠なからぬ努力を  
要してある。

◇ 地方新聞の新年懸賞川柳へ

かきつばた今ぬすまれた水の色  
を投句して天位に納まつたそれがしがあ  
つたのは慥か一昨年であつたが、又候同  
紙の天位へ

撃かれた馬手綱だけ草を喰ひ

——綱だけの—— (古句)

が發表されて選者に大迷惑をかけてゐる之等は選者の罪といふよりも、投句家の懸賞にあせる悪戯として大に攻む可きものである。

◇ 翠丸を研究して博士號を貰つた人はあるが、川柳を研究して博士になつた人は

## 川柳を客觀せよ

出口 雨 町

ない。

明治時代に

お七翠丸を出して素人芝居幕

を作句したのが既に俳句ミ歩調を同じく

進まなかつた原因と言つてよい。

(昭和五年一月三日)

「川柳を客觀せよ」は冷靜なる理性によつて批判せよといふことである。凡そ批判のない處に進歩がない如く客觀しない處に正しき批判はあり得ない。更に「川柳を客觀せよ」は眼をみ開いて川柳の圏外に立ち、一般文藝的レベルから批判せよといふことである。今日傳統派の通語となつてゐる「川柳はごきごきでも川柳だ」さか「川柳は川柳らしくあれ」等いふ言葉は要するに何等の内容をも持たぬ痴人の讒言である。何となれば、もし「女

は女らしくあれ」を固持してゐたならば、恐らく目覺めたる近代女性の誕生を見ることは出来なかつたであらう。女が女の圏外に立つて客觀し、從來の夫婦生活乃至社會的關係を批判したればこそ、初めて近代女性といふものが生れたのだ。だから我々は決して川柳に眼がくらんではならない。川柳に呑まれてはならない。批判を怠つてはならぬ。試みに歴史を見よ。政治が民衆に批判することを許されなかつた時代は、政治に進歩がなか

つたではないか。そも／＼思想にしろ、道徳にしろそれが客觀され批判されない限りは、人智の啓蒙、人類の進化は期し難い。したがつて傳統派の人々は己が通語によつて自らの川柳に進歩の可能性なきことを雄辯に裏書してゐるわけだ。

しかし彼等も又新興派に對して言ふだらう。「君達のいふ川柳なら何も川柳云ふ名を付けなくてもよいではないか」。だがこれは單なる詭辯に過ぎない。新興川柳といへども決してふいに飛び出して來たものではなくて、もこ／＼傳統に系統をひるてゐるのだから、傳統派にあきたらなくて進化したものだから。川柳といふ名に何の不都合もない筈だ。

かつて反対派から極力異端視された表現派やダダの文藝も今日では、それに「繪だ」「詩だ」「劇だ」いふ名稱を付するに、誰一人として異論を挟み得ないまになつたではないか

私は又言ふ。川柳は五郎劇よりも深いものでなければならぬ。川柳は芝居の尻着きではなくて、時代の尖端を行く詩で

なくてはならない。川柳的興味に欺され  
てはならない。

再び言ふ。川柳を客観せよ。そして一

## 柳論を奨む

川柳に對する私見を發表——

大 窪 文 芳

同一主義の柳誌が一脈を通じ全國的に  
歩調を同じくすることは川柳をより以上  
社會に認めさすに好都合でないかと思ふ  
余の持論である。

現下柳壇を眺めて群如割據戰國時代の  
やうださ歎く人がある。余は之れ是非必  
要な事で、斯界の爲いつまでも續けて欲  
しいと願ふ者である。柳壇の向上發展上  
誠に喜ぶべき現象であるを考へる。

現在川柳上見解を異にして各自思ふ方  
向に伸びつゝあるそれは、何れが正か邪  
か、何れが迎われ、又排せられるかは  
現在の川柳人では判断がつかぬ、故に見  
解が岐れ、論戦が起る之れを公平に價値

歩一步その生長を助成せよ。實に川柳は  
生きてゐるからだ。(四、一、二、四)

づけて呉れる者は吾人等より二代三代後  
の川柳人又は社會である。

現在の異なる見解を作用に眞價を見出  
して呉れる後世の人が審判して芭蕉を見  
出し又は貞門、談林の幼稚俗惡に均しく  
見做し捨て、價値が極まる。それが最も  
正しい眞の價値である、現在の川柳人は  
各自の思ふ處へ向つて進み努力を吝ま  
ず務めて意見も闘はして置くべき事を切望  
する。

余は、川柳の傳統を尊重して其圈内を  
擴張し時代思潮、風物を盛つて猶餘裕あ  
る自由さを認めて、新川柳を生む源泉と  
したい。

現下柳壇の異説はどれもいまだ服する  
に足るものがない、川柳は今實際古い殻  
を破つて出たものの惱んで居る時である  
川柳は川柳である絶對的のものにして呉  
れる一人の偉人を待ち望んで居る。

余は何故柳壇の群雄割據戰國時代のさ  
まを憂ふる人に反對するか、其人の望む  
如く現下柳壇に元祿の芭蕉、明治の子規  
の如き人物の誰一人なき現在が無事泰平  
何事もなく異つた見解の言を聞かず又作  
句態度が同一軌道を辿つて居たなら川柳  
はいつまでも藝術上の水平線下に甘んじ  
て居る覺悟を持たなければならぬ、此水  
平線高高くへ浮ひ出させたい熱望より歩  
調が違ひ見解を異にして雜誌が生れ来る  
そこに刺戟を感じ、緊張味が湧き柳論戦  
が起つて来る、其何れもが要は川柳の向  
上を期し或は大衆化を叫んで川柳を今日  
の地位に引き上げ又地歩を占むるに至つ  
たのである。

今日までに若し此事なかりせば柳壇は  
自然無りに落入り、水底深く沈みて遊戯  
文學として天保調の狂句に復つて行つた

であらう。斯く考へ及ぼすに柳壇を今日以上に成すには猶々見解を異にして既刊誌に不平を抱く者さし、柳誌の刊行を企て大に論戦を盛んにすべきである。正しき條理、慕しき句風を實際に極めて呉れる者は吾等でなくして吾等より後の人である。

川柳は第一義の生活を基調としてそれから得たる感情を五七五調の形式を以て表現する場合に可笑味、穿ち、軽味を技巧的に含ませ野卑に流れず、淫猥に涉らず、俗悪輕佻な洒落滑稽に落入らざるやう純真な發露でなくてはならぬ。猶今日川柳の誤れるは、古人の詠み遺せしものと表現手法に其罪ありと言ふべし、今日の作家も全然頭が違ひ何でも捻ねられ理窟的に詠み出す事を能とし、人生の機微に喰ひ入り實想を穿つを旨して美を第二とせしたるより世人に誤解せられたのである、之れを正すために吾等は常に神經質的に同じ様な事を叫び續け居るのである。

川柳を作るには月並俳句の手法を心得て居れば間違ひないと言ひし人あり、此言を聞きて某誌を見れば、成程其言の當

れる句が多いのに驚いた。堂々たる一流の柳誌を以て自ら任じ、發行部數第一を誇る某誌に此如き句のあるは怪しむに足らざる事を知つた。川柳を享樂本位に扱ひ陶然たる人の如き同人の團體である、川柳は詩であるさ唱へ乍ら前に述べし如く古句の手法を其まゝ踏襲して可笑味、穿ち、軽味を第一義に置き技巧を多く用ひその次ぎに美を置かれて居る觀がある又「も」の字を用ひて表現された句も多し此「も」の字を使つた句は必ずその表裏に對比すべき物があり、句面に表はれて居らぬ隠れたものを考へさせる場合に使用された文字で其句は必ず知識を働かすまでに及ばぬが或る程度まで考へさせる謎の句か理窟の句である、月並手法の句と共に藝術價値の全く欠けたものである。

斯く言ふ吾人も非藝術的川柳を長期に涉つて作り來つた理窟めいた句、譬喩の句、下手な擬人法を用ひし句、誇張的に形容した句、之れ等は藝術上執らざる處で三文の價値もない事を覺つて後らいたく此手法による表現句に對し態度が變つて來た。余は柳界の誰よりも遅れて斯様な事を知つた者さ恥ぢて居つた處、現に堂々とおくせず斯様の句を發表してある

を同じく某誌に散見して遅れたりと思ふ余に小易さを與て呉れはしたが、柳界のため痛恨事として某誌名は擧げはせぬが暗に指摘する機運が某の月並云々の言葉より筆を運ばせた。

以上述べ來つた點より此「川柳雜誌」に接するに吾意を強ふして呉れる選句振り「近作柳壇」は示して居る。未だく川柳は詩であるこゝを社會に認めて貰ふには先づ一部分の指導の位置に在る者を教育して一般作家に及して行かなければならぬ遠いことだ。

此自覺が現在の川柳家にない者がいまだ多い、川柳を藝術の域外に置いて作句に精進する者には全く用をなさん閑文字である。川柳は詩である短歌、俳句に遜色なきものと思惟する人若くはレベルを其處まで高めたき人は此拙文を厭味して貰ひたい。此自覺のある川柳家さなひ者さ何づれに藝術的價値を有するかを認めると呉れる者は後の世の者であるこの謂は此處である、吾人等はさして進んで居る一方に否さしてか至らざるにしかか恰も無自覺者の如き態度で居る者がある、吾等の進路が正しきか或は排斥せらるるかは第三者の批評を待つものである。

(昭和四、一、二二〇)













席題 島田 田 五 選

鏡臺で島田に結さばよく寫り  
高島田まだ羞しく湯に這入り  
雷相  
追羽根に島田の袖に春の風  
幸永  
高島田金簪が燭にふれ  
松隠  
つき合ひに少しは笑ふ高島田  
輝余彌  
先生へ島田になつて禮に来る  
緑之助

川柳雜誌社  
茶ヶ池支部 普門氏送別句會(大阪)

十二月廿五日 植田湖舟報

新年の佳節を前に目出度く退院をされた普  
門氏の送別句會を病院の娛樂室に於て開催  
致しました。

兼題 光 普門 選

瞳にも彼の偉さが光つて居  
長城  
燧道の長さ光を懐しみ  
運坊  
念佛の光へまろさ笑はれる  
柳月  
金具だけ光つて御輿の古い事  
澄美夫  
すましてる眼鏡光つて寫つてゐ  
詩華流  
裏通り電氣の下へ用が出来  
金時  
日光へ親しみをもつ快復期  
藏六  
月光の彼岸へ喘ぎ二十年  
一味  
光へその横顔が泣いてゐる  
阿矢  
太陽の光に朝を飛が起きてゐる  
湖舟  
逆境に光りを見つけ生きてゐる  
續  
ピフテキへ光るナイフの切れ工合  
やの字  
(人)異國にて月の光を懐しみ  
奈々子  
(地)溜なみだ五色の光フト見つけ  
柳月  
(天)夜のベツト冷たく光る銀時計  
一味  
(軸)ごん底の冷たさ光ある男  
普門

席題 盃 湖舟 選

盃を渡してちようし振つて居る  
澄美夫

酒呑のわりつた昔さすぎ  
伊勢子

元日はさもかく猪口を持たされる  
種

乾盃は空の勇士を圍んでる  
金時

盃を並べ苦しい酒となり  
波紋

盃へ親しみを持つ灯が點り  
長城

一廻りした盃へ不禮講  
普門

成功の片手に持った記念盃  
柳月

祝盃へほんのり赤い婦人團  
松汀

(佳)おながれの猪口へ末席恐入り  
松蓮子

(佳)盃を受ける手付きがやつと出来  
同

(佳)盃へ小さい意地の思ひ出し  
仙羊

(佳)酒好きな父盃を手に持たせ  
波紋

(地)天盃のたゞ有難い酒の味  
運坊

(天)盃 細かくゆれて 端唄なり  
柳月

(軸)盃の手がふるえてる綿帽子  
可章

兼題 祝 五 選

家中が祝つてくれた膳につき  
湖舟

皆んなして祝ふ言葉へ祝祭日  
藏六

日章旗に高くのごかな祝祭日  
阿矢

祝辭讀む代表口を引きしめる  
至光

開店へ祝のピラが巾を取り  
松露

はりこんだつもり粗品として祝ひ  
波紋

祝物隣の留守へおいてをき  
古銭

これはまた意外なさから祝物  
義人

大袈裟な割にアツ氣ない祝賀會  
奈々子

結婚の祝の言葉夢に聞き  
やの字

明治

薄化粧で妻いそぐ内祝  
普門

知らせない祝を近所持つて来る  
長城

祝砲に來て母親は飯を炊き  
可章

祝砲を知らずに鳥の逃げまじい  
湖舟

退院を祝ふお餅の赤ま白  
松蓮子

祝膳友は堅苦しく座り  
一味

川柳 梅田支部句會(大阪)

雜誌社 十二月廿四日於里十九居姫田夕鐘報

里十九氏の喫茶店開業に先きだちて記念句會を開く

兼題 開店 かほる 選

開店へもう儲うかつた氣で座り  
里十九

開店の奥に大工の音がする  
觀月

開店の先づ友達に賣れるなり  
同

開店の花環をのける程になり  
石竹

開店の一番さきはごんな人  
同

手拭の角立つてゐる開店日  
同

開店に氣づかふた空暗れてくる  
夕鐘

開店をよそに猫が眠つてる  
同

身も心も疲れて今日の上り高  
同

家中が風味をして開店の朝  
同

散髪をして開店の朝をまち  
同

女達が來て開店の椅子へかけ  
同

開店の赤いづくめの夜さなり  
同

淨瑠璃の會を休んだ開店日  
同

(軸)開店の火鉢で煙る巻たばこ  
かほる

兼題 鏡臺 五 選

鏡臺と並べて彼れの寫眞なり  
ト居

鏡臺に向つて足袋を履いてゐる  
觀月

石竹



(天)病んで居る目に雪もよこ花は  
(軸)失業のいつそ呑みたい雪に  
奈翁詠 緑之助

通信簿 通信簿 雷相 選  
通信簿今度元氣よく見せる 枯 楓

通信簿落第といふ汚れやう 奈翁詠  
通信簿冤に角親として印刷 花情

通信簿約束のもの買はせられ 幸 永  
通信簿ついて眼鏡言ひつかり 琴 朗

晩酌の父が賞めてる 通信簿 專 路  
(人)土藏から父の通信簿を見つ 緑之助

(地)通信簿笑顔の中を廻され 幸 永  
(天)通信簿嫁の肩身も廣くなり 緑之助

席題 玩具 琴朗・幸永 選  
母の聲がしたので玩具投げ出され 花情

膏藥を大きく張つた玩具箱 緑之助  
人形の手も足ももぎ嬉しがり 專 路

玩具だけ散らばり春の午後 靜か 枯 楓  
寢そべつて玩具の如く子をあやし 雷 相

まだ持つてぬ玩具を買ふてすりつ 同  
立 話 專路・花情 共選

風邪氣味を言ひく 長い立話 緑之助  
立話サドルに膝をつけて立ち 雷 相

立話 右と左へ散る 心 枯 楓  
立話ふと急用を思ひ出し 專 路

立話ハットライトにチト周章で 奈翁詠  
立話一人は星を見つめて居 幸 永

買ふた子をすかしてまでも立話 琴 朗  
込み入つて何時しか駒む立話 同

席題 妻楊子 奈翁詠・枯楓 共選  
妻楊子それはそうだぞ 幸 永  
言ひ惜い話楊子のよく動き 枯 楓

妻楊子叩えて 御苦勞はんさある 花情  
言ひ買けて只妻楊子もてあそび 專 路  
妻楊子金の無心と氣づくくなり 緑之助  
固い臍子楊子せんかたなくも折 同

呑み足らぬ目を据えてある妻楊子 同  
妻楊子午後の目を賞めてある 雷 相  
一笑に附して座を立つ妻楊子 同

妻楊子藝者の年齢を聞きながら 同  
席題 面會、軸 互 選  
面會を断はり炬燵でまるう居る 花情

代表へ社長寢巻のまゝで出る 幸 永  
大幅へ靜かに座り茶をすゝり 專 路  
大川の掛けごとなく持つてある 緑之助

川柳 糸屋町新人會 (大阪)  
雜誌社

一月三日夜 於舟々居 川合舟々報  
三年前の昭和二年一月三日初めて いた糸屋町ケループは今に至つても當時の

人々が共に柳人として 亦支部同人さして活 躍されてゐる事は誇るに足ると思ふ、記念す

べき一月三日、當時と同じ課題(社)の下に新 人の會合を得て小集を開き初めて知つた、川

柳の愉快さを語る。  
兼題 社

登校の兒お社で脱帽し 英 一  
お社に詣でる心の数々や 一 騎  
朝 歸り社の前で頭下げ 規 堂

清い心社の前に立つてゐる 正 博  
日當りのよい境内が遊び場所 同  
昭和二年當時の句(未發表)

牛の角避けて廻つた石鳥居 白 嶺

御明しがまだ消へてない初詣で 舟 々  
柏手はこだまを交せて四つ聞へ 毒 仙  
戯ひ繁るづつと向ふに鎮座まし 翠 峯  
老杉の影にふくくるの住む社 赤 城

兼題 馬  
門松をかむでる馬を叱られず 一 騎  
馬市に引かれ行くのか鞍もなし 規 堂

なぐられる馬に代つてやりたい氣 正 博  
初荷の日馬も化粧をしてもらひ 英 一

サーカスの馬は勝手に蹄るなり 舟 々  
席題 丁 種

坊んぐだからだま丁種譯を云ひ 正 博  
遊ぶより食べて寝たま丁種なり 一 騎

数人の丁種たもとが氣にかゝり 規 堂  
角帯の丁種はませた事を云ひ 英 一

番頭のしくじり丁種叱られる 同  
豆本に丁種は寝ようとし 同

風 邪 に 丁 種 さ ぞ 知 る 同  
川柳雜誌社 湯苔吟社句報 (別府)  
別府支部 小川三猿堂報

兼題 興 奮 琴 人 選  
横顔へたきつきたい辭表持ち 清 路  
興奮のまゝに吹かれる冬の風 詩 津 女

興奮の一人を先に皆んな行き 突 如  
興奮のあまりに過去を語るなり 豐 泉

興奮へ特に云ひ添へ醫者は去に 夏 宵  
興奮の頭へ熱い血を感じ 同

學生角力を見て 劍 阿 彌  
常勝は興奮を抑さへる笑を持ち 圓 角

及第を知らせに興奮の友の聲











# 編輯後記

△各地の柳友諸君から社並に私宛に年賀状を頂きましたことを厚く御禮申し上げます。一々御答禮申上げました筈ですが、不着のものもあらうと思ひますのでその點あしからずおゆるしを願ひます。小生は年末の多忙に初刷で賀状を差し上げる積りでゐましたがそれも次第に遅れに遅れて漸く十一日に刷上つたやうな始末、それから三日ほどは賀状書きに潰れました。引き續き本號の編輯で多忙に次ぐ多忙で、時にはきつちりさ賀状を年賀郵便に托される餘裕紳々の人達を羨ましく思ふこともあります。

△新年號は豫想以上にいいものが出来たさ多くの讃辭を頂きました。これはあながち川柳雜誌フアンの聲だけでもありませんから大いに意を強くしてゐます。同人一同一層の奮勵を期して居りますから、愛讀の誌友各位からも倍舊の御後援にあづかりたいものです。

△大連の中沼若蛙氏が「川柳雜誌」の川柳の社會化も久しいものだが云々といふやうなことを某誌に書いてゐられるが、若蛙氏には川柳の社會化といふことがお解りでないらしいのです。私は川柳の社會化を説く必要を認めぬ時代の一日も早く來らんことをのぞんでゐるのですが、斯うした大事業は私一生の仕事になるかも知れないのであります。斯ういふ耳觸りでも辛捧して頂かれはなりません。辛捧して頂くだけでなくお互ひ川柳人には援助してさへ頂かねばならないのであります。川柳の社會化も久しいものだが、その實が一向あがらないではないかといふ御詰問だつたら、その御心配は御無用なのであります。我社では着々とその實は挙げつゝあるのではありませんが、若蛙氏が御存じないのであります。否御存じないのでなくて意識されないのであります。意識されないがそのことを問題にされるほど我社の宣傳は行き渡りつゝあるのではありません。宣傳の意義、方法その他については各地の人々にもくどいほど申上げてゐる筈であります。

すから、今更には説きませんがそんな揚足取のものをいふことも書いてある時代でないことだけは申上げて置きたいのであります。川柳家以外の人達からの寄稿だの、ルビ付印刷が低級視されるのさいふやうなことも書いてゐられるが、これについては蛭子氏も書いてゐられるので私からは重ねて申上げません。

△五日の新春會には東京から前田雀郎氏がわざわざ本社のために來會講演されることになつてゐたので會場のせまさを感じるほどに多量に多量に多量に多量の差支があつたが、新年宴會の差支が多く豫想ほどに多量の差支者が得られなかつたことは遠來の同氏に對しても幹事の一人として甚だ遺憾に思つて居りますが、眞に眞面目な會合であつて同氏の講演が氏独自の境地を語るもので柳友諸君の謹聽に値するものであつた事は何よりでありました。本號にはその講演筆記をかゝげることになりましたから御愛讀を願ひます。

△七日に釜ヶ池の支部の會がありました。私は句會後の疲労で風邪をひいて出席出来ませんでした。

△十日の夜、御旅支部の會へ出席しました。散會後新春の微碎氣分で千日前の寫眞屋へ圓角、多郎、翠夢、路鳥、飛佐志の五君と飛び込んで諸君をアツと云はせるつもりであつたが、同人冷刀君の計によつてこの寫眞は没にするのことにいたしました。衣装が充分でないにもかゝらず寫眞は相當に面白く出来て居ります。他日發表する機會があるかも知れません。

△十二月の月評會は里十九居で開きました。新年の月評會は一月十日の夜もこのひろし居でひらきました。琴人君は親戚に病人があつて東上、山雨樓君は家事の都合上、小生は先約があつてどうすることも出来ず、今回は紋太君を中心にしてひろし君と新にアイロニストの革郎、モボの亂就の兩君を加えて開催することにいたしました。いつもさいさか變つてゐて興味が深からうと思ひます、御愛讀を祈ります。

△十三日の夜至誠川柳會に出席しました。當夜は至誠川柳會の

初句會のことでありますから大いに賑やかにやらうと云ふので幹事の間多君の肝煮り、漫画家藤原成憲氏が出席され、當日の兼題の漫画及び参會者の似顔を揮毫されて興をそへられました。自分も贅をこらして短冊を汚したりして春らしい氣分に浸りました。私も横顔を描いて貰ひました。

△十五日の夜、社友懇談會を端の坊で開き社の經營上の問題その他について協議をいたしました。協議が終つてから作句をいたしました。散會後社友永田里十九君が新に經營した喫茶店「かなめ」に立寄りました。今後里十九居（大阪市南区壘屋町周防町東入南側）の階上に川柳雜誌社の俱樂部を設けることにしました。他の會日の衝突しない限り一日十五日の夜には、社友同人が會合することにし、またから立寄つて下さい。規定日外に利用されることも差支へありませんからせいよく利用して下さい。

に申電を打ちに難波驛まで出かけた。歸宅しますと矢田君の宅からも悲電が届いておました。つくづく、人間の不測の壽命について考へさせられました。健康そのもののやうなからだの持主だつた矢田君のこと故一時入院はしても眞逆に亡くなりはいまいと思つてゐたので、自分は一日中暗い氣持にさざざ



矢田冷刀君

何も出來ずに暮らしました。同君の訃が本號の編輯實際だつたので故人の小傳すらも誌上に傳へることが出來ないのは甚だ遺憾であります。さては次號に譲ることにいたします。

△客員安川久流美氏は新年の北國日報を川柳及川柳的記事をもつて埋めてあられました。同志らしくて大いに愉快でした。殊に句評を題して本誌新年號の近

作柳權に投句してゐる石川縣下の人々の作品の批評をかかげてあられるなど實に、思ひつきだと思ひました。

△松山の前田五健氏から伊豫鐵の「社友」といふ雑誌の寄贈をうけましたが、ひらいて見ると同氏が句に文に縦横無盡に執筆されておます、私が海南新聞に書いて松山市大道の電燈問題にまで筆が飛んでおました。素人君の語るさころでは五健氏は思つたことを思つただけ喋べり得る人ださうござですが、又書き得る人であることも知られ

△同人橋本二柳子君が編輯の席上で突然縁雨を改號する旨を発表いたしました。あまりの突然さに一同一寸驚きました。同君のござですか、熟考の上であることは云ふまでもありません。口癖になつてゐる連中呼ぶのに困つて二柳子の縁雨君と呼んでおます。當分は皆弱らされることとせう。

△同人酒井駒人君の住む平塚町が舊冬一千戸を灰燼に歸しました、早速聞いてやりませす。駒人君の宅は幸ひ残り七千戸の内におりましたので御安心願ひます

御見舞狀を頂いた方々によるしく云つて呉れとのことずす。

△一昨年の大晦日は琴人君と二人でちびり〜とやりましたが、舊冬の大晦日は午後から亂耽、愚陀の兩君がやつて來ましたのでちびり〜と呑み暮らしました。來る筈の琴人、ひろし君も姿を見せないで三人でたまを突きに行きすつかり新春の氣分に行つたのが午前一時すぎでありました。

△社友増位汀柳君は酒間屋を一時休業されることになりましたので酒の新聞も休刊されることになりました。同紙上に連載した私の「酒前酒後」も隨つて休載されることになりました。同紙が廢刊することになり、切れるか、そこまで書きつづけることを宣言してゐたので、私もホッと息をつきました。私が頻りに酒のことを書いたわけでもなからうが、年末年始へかけて到來品が殆んど酒ばかり、しかも天下の銘酒揃ひであります。曰く松竹梅、曰く菊正宗、曰く白鶴、曰く櫻正宗、曰く白雪、曰く澤の鶴……ああ、もう云へない右の外にリキスキーのあつたことは勿論であります。

（路那生）



### 投稿規定

▼近作柳檉及課  
 題の句稿は  
 葉書又は同型  
 の厚紙に各題  
 別紙に認め  
 住所氏名雅號  
 を明記するこ  
 と。

▼各地會報は半  
 紙判の原稿紙  
 に清記のこと。

▼文章は二十字  
 詰半紙判原稿  
 紙に認めるこ  
 と。

▼書體はなるべ  
 く楷書「川柳  
 雜誌原稿」と  
 封筒に朱記す  
 ること。

▼締切は嚴守さ  
 れたし。

▼投稿其他につ  
 き御問合はす  
 べて返信料封  
 入のこと。

## 募 集

### 第七卷第四號課題

二月五日締切

(各題十句以内)

▼馬 松丘 町二選  
 竹内 多聞選

▼娘 酒井駒人共選  
 石川双葉子

### 第七卷第五號課題

三月五日締切

(各題十句以内)

▼水 大島 濤明選  
 松盛 琴人選

▼保 水谷 鮎美共選  
 森 石竹

### 每 號 募 集

▼近作柳檉(拾句迄) 麻生路郎選

▼各地柳壇(會報)

▼文章(評論研究感想吟行漫文)

### 社 告

社務一切(編輯に關する件、投句、購讀  
 廣告)の用件は下記川柳雜誌社事務  
 所宛に願ひます

### 定 價

普通特輯號 一部 金參拾錢  
 新春特輯號 一部 金五拾錢  
 八月特輯號 一部 金四拾錢  
 半箇年前金(特輯號共)壹圓八拾錢  
 壹箇年前金(特輯號共)參圓六拾錢

### 廣 告 料

本誌への廣告に就き  
 ましては本社へ直接  
 御一報下さいませ  
 ば御相談に應じます

▼御送金は振替口座穴六七五〇五〇番へお拂込みになるのが一番確  
 實であります▼誌代受領は送本によつて御承知願ひます▼送本封紙  
 に前金切の印ある時は直に御送金を願ひます▼御希望により集金  
 郵便を差立てますが御不在中でも頂ける様に願ひます、但集金郵便  
 (一年分)には定價の外に手数料十錢を申し受けます▼御注文には  
 何月號よりと御指承願ひます▼轉居又は改名等の節は舊新併記して  
 御通知願ひます▼川柳雜誌に關する御用件は個人宛にしない事

昭和五年一月廿五日印刷

昭和五年二月一日發行

第七卷第二一號  
 (毎月一回一日發行)

大阪市内西成區千本通五丁目七番地  
 編輯兼發行印刷人 麻生 幸二郎

大阪市内西成區千本通五丁目七番地  
 發行所 柳 雜誌社

大阪市内住吉區杭全町六〇三番地  
 振替大阪三二五一四番

## 川柳雜誌社事務所

振替大阪七五〇五〇番  
 電話天王寺一六七番

店書捌賣  
 (大阪) 大賣捌 サクラヤ書房。(明文堂 其他市内各書店)  
 (東京) 仲見世 玉森堂(神戶) 米田、後藤、寶文館(函館)  
 石塚(石川縣小松)マコト屋(京都)三宅(松山)弘文舎



## 古本屋時代

今のやうにあさから／＼新刊が出る。新刊を一々讀破することは容易ではない。たゞへ新本を買つてもいよく讀むころになれば、もう古本で至極新しい本が出てゐる。こゝうなればわざ／＼新本を買ふ必要がなくなる。極く綺麗な古本が出れば全く新しい本を買ふのは莫迦らしい事である。殊に

## 公立社の棚

には斯うした新しい古本が時々提供されるのであるから我々讀書子にとつては、誠にありがたい譯である。諸君も私と同じやうに公立社の棚から至極最近に出た本の古本を求められたならば幾冊か求めるうちに幾冊かをローハで讀める利益があらうと思ふ。

(路那生)

# 古

# 本

高價に申し受けます。

御通知次第早速參上確實

迅速に御取引致します。

## ▲日本橋

を南へお渡りになつたら、直ぐ南へ這入つた東側です。本店が從來の店の一軒置いて北隣へ移りました。從來の店はそのまゝ營業を續けて居りますから一層お引立の程祈上げます▼

# 公立社書店

大阪市南區日本橋南詰南入

電話 南 五 六 二 番

# 清 酒

午後六時 白鶴が待ち妻が待ち

白鶴をチントンシヤンと提げて来る



灘 津 攝

釀 社 會 名 合 納 嘉



麻生路郎氏著

吉岡鳥平氏挿繪  
柴谷柴舟氏挿繪

四六版・三九一頁  
美裝函入・挿繪六十葉

# 川柳漫談

定價金壹圓五拾錢  
送料金拾貳錢

## 本書の内容

▼川柳漫談 (臍の緒、盲人の徽章、蛙、夫婦喧嘩の解剖、都會地獄、君も僕も死ぬ話、レディーメイドの書置、戀を追ふ一人者、指切、鼠盗人、女の三十、賽銭、重役、フアブルの糞の外交、幽霊の靴、近眼の微笑、傘の行衛、猫の寫真、愛の巢、保険屋の新聞屋、質趣味、床下の佛像、無口附貸の犬、鼻の修業、なりさがり魂、校長さん煙草、私の墓) ▼川柳染ちがひ ▼ト昔前の大阪見物

麻生路郎編著。柴谷柴舟漫畫並裝幀

## 内容概目

川柳漫畫 累卵の遊び  
日月は輝く  
大衆と共に

著者のサイン御希望の方はその旨附記して御注文ありまし

# 川柳漫畫 累卵の遊び

漫畫三十二葉・四六版・美裝・函入 定價一圓 (送料拾錢)

大正十三年三月三日發售三種郵便物認可 (毎月一圓一日發行)  
昭和五年一月廿五日印刷本 昭和五年二月一日發行

川柳雜誌

(第七十三號)

定價金三拾錢

大阪西區本通七番五  
大阪西區成道千本通七番五  
大阪西區市西區成道千本通七番五  
大阪西區市西區成道千本通七番五

賣捌所 不 朽 洞